

財団25年の歩み

財団法人 日本音楽財団

財団25年の歩み

ごあいさつ	会長 首藤 堯	2
祝 辞	日本財団理事長 笹川 陽平	3
沿 革		4
Brief History of Nippon Music Foundation		6
第 一 部	日本音楽財団が目指すもの	10
	1. 社会教育の一環としてのアマチュア音楽の振興	11
	2. 音楽分野における国際交流	12
	3. 我が国における演奏会活動	13
	4. 音楽ライブラリーの整備と調査研究	14
第 二 部	歴史編「財団25年の歩み」	
	第一章 アマチュア音楽の振興	16
	財団法人 日本国民音楽振興財団時代	
	第二章 クラシック音楽への転換	46
	財団法人 日本音楽財団への改称	
第 三 部	歴代役員・評議員	69
第 四 部	資料編	79



ごあいさつ

当財団は、1999年(平成11年)3月23日に、設立25周年を迎えましたので、この25年間の活動記録を「財団25年の歩み」として取りまとめ、永く記録にとどめることと致しました。

一概に25年といっても当財団の場合は2つのステージに分けられます。その第1期は、設立された1974年3月からの約20年間です。アマチュア音楽の振興、特に青少年の健全育成を目指した学校における音楽教育、その中でもマーチングを含めた吹奏楽、合唱、オーケストラの振興がそもそものスタートでした。アマチュア音楽祭やクリニック、特別演奏会の開催、高校吹奏楽団の海外派遣、楽器の貸与など多種の事業が続々と企画実施されました。このように事業が速やかに実施されたことは、当財団の設立に尽力された各位が事前において綿密な計画と準備とを進められたことによるもので、そのご努力に対しては心から敬意を表します。

第2期は、財団設立20周年を迎えた1994年3月以降です。それまでのアマチュア音楽の振興に加えクラシック音楽を採りあげ、むしろこの分野を重点とした大きな事業転換を図りました。特に弦楽器名器の貸与事業を中心とする国際交流事業は、音楽分野における我が国の国際貢献として国の内外から高い評価を得ており、当財団としては今後ともこの分野での活動を強化していかなければならないと考えております。

最後になりましたが、この25年間において財団に寄せられましたご関係の方々の数多いご支援・ご協力に対し、心より感謝申し上げます。特に、当財団の活動は、競艇の交付金による日本財団の多大な助成によって支えられております。ここに日本財団及び競艇関係の方々に対し、深甚の謝意を表しますとともに、今後とも絶大なご支援をお願い致します。

財団法人 日本音楽財団

会長 首藤 堯



祝 辞

日本音楽財団が設立25周年を迎えられたことに、衷心よりお祝い申し上げます。

1994年、財団が20周年を迎えられた折、私は古楽器とりわけ弦楽器の保有と、その国際的な貸与事業を行うことを提案しました。当時、我が国はバブル期最後の時代であり、大量の西洋絵画や西洋古美術が高額で輸入購入され、そのほとんどが銀行の地下金庫等に死蔵されたままで、世界の響きをかっっていました。

文化交流は日本の外交の柱でもあり、日本政府もその重要性は理解しています。しかし、国の行う文化交流は歌舞伎、茶道、華道等、我が国の伝統芸術に主眼がおかれています。ひるがえって、明治以来西洋音楽については西洋からの一方通行の歴史でした。そこでお世話になった西洋音楽の分野でも何かお役に立ちたいと考えたのです。才能はあっても良い楽器にめぐまれない音楽家に協力しよう、加えて世界中の音楽家に喜ばれる最高の音楽と最高の音を音楽ファンに提供しようというのが私の考えでした。

幸い、日本音楽財団では私の主旨に全面的に賛同くださり、この事業は、国際的に大きな反響をよび、短期間に認知され大きく発展しました。

今後は、日本音楽財団がその名前にふさわしい、日本を代表する世界の財団として、さらに発展されることを期待します。

財団法人 日本財団

理事長 谷川 陽 平

沿革

財団法人 日本音楽財団の前身である「財団法人 日本国民音楽振興財団」は、1974年3月23日に設立された。設立の趣旨は、「次代を担う青少年の健全な育成のためには体の鍛錬と相俟って情操の涵養に力を入れなければならず、そのため幼少期から音楽に触れ訓練する機会を作り、アマチュア音楽を振興し、もって広く国民の音楽文化の発展を目的とする」というものであった。

アマチュア音楽振興事業は、爾後20年間に亘って精力的に展開された。詳細は第2部に譲るが、音楽祭の開催、演奏会の開催、講習会の開催、楽譜出版(創作曲コンクールを含む)、施設訪問演奏、パレードの開催、楽器貸与、練習施設貸与などの事業が日本全国各地で実施され、また、海外交流の分野でも吹奏楽団や合唱団の海外への派遣あるいは海外からの受け入れが行われてきた。

この20年の中で1989年度及び1990年度において、事務局職員の払底から生じた事務局機能の喪失により事業が途絶えたことがあった。しかしながら、関係方面の非常なご努力とご協力とによって、1991年度からは事業の復活を果たすことができた。

その後、1994年3月には設立20周年を迎え、事業内容をクラシック音楽に大幅転換することとなり、財団の名称、事業内容並びに組織の改組等を行うため寄附行為の変更を行った。新名称は「財団法人日本音楽財団」であり、同年4月19日に文部大臣の認可を得て正式発足した。

1994年からの事業の柱は、①音楽助成金交付事業、②演奏会事業、及び③国際交流事業の3本である。

音楽助成金交付事業は、それまでの音楽普及事業(講習会の開催等)の流れである。但し、内容を見直し、対象をアマチュアだけでなく職業としての音楽家になろうとするグループも含め、音楽領域も弦楽器を中心としたクラシック音楽を加え、事業の指針として、演奏機会の増大、演奏技術の向上、中間指導者の育成、国際交流、ボランティア活動の5点を採用した。

演奏会事業は、良質の音楽を低廉な価格で愛好家に提供するものである。特に、海外からの著名な指揮者とオーケストラのコンサートは、日本のそれと比べると破格の価格であり、一般の人、特に学生や勤労青少年たちが気楽に鑑賞するというわけにはいかない。我が国においてクラシック音楽を普及するためには、このような機会を増やしていくことが必要である。

音楽国際交流事業は、我が国の音楽分野における国際貢献を目指すものである。我が国の音楽家が欧米の音楽学院で奨学金付きで学べたり、欧米音楽界で暖かく受け入れられている現状に鑑み、経済大国となった日本がこの分野で国際貢献をする必要があることは、国の内外からの強い要請であり、国際的責務でもある。具体的には弦楽器名器の貸与事業を選択した。17世紀後半から18世紀前半にイタリアのクレモナ地方で製作された弦楽器は最高のものであるとして演奏家にとっては垂涎の的となっている

が、一演奏家が購入するには余りにも高価なものとなっている。よって財団が演奏家に代わりこれらの名器を購入し、国の内外を問わず一流音楽家もしくは若手有望演奏家に無償で貸与することは、時宜に適ったものといえよう。そして、それらの楽器を使用してのコンサートを自主企画し、実施することは音楽愛好家にとっても好感を持って受け入れられることである。

このような当財団の活動は、競艇からの交付金に基づく日本財団(財団法人日本船舶振興会)からの補助・助成事業として実施された。

設立時の基本財産は、日本財団から6千万円が拠出されたほか、故笹川良一氏から1千万円が寄付されている。

1974年3月から1999年3月までの25年間における当財団の純収入総額は84.2億円である。そして日本財団からは、前掲の基本財産のほか、補助金8.4億円、助成金12.8億円、事業基金58.7億円、合わせて80.5億円、全体の95.6%を占める資金が提供されている。その他の収入は、基金利息、入場料収入、共催負担金などの自己資金である。

事業基金は、弦楽器貸与事業を主とする音楽国際交流事業実施のために1993年3月から拠出されているもので、その主たる用途は弦楽器名器の購入である。後述する12挺の弦楽器(ストラディヴァリウス10挺、デル・ジェス2挺)の購入価格合計は購入時点では50.7億円であった。しかしこれらの楽器の1999年3月時点での評価額は約57.6億円となっており、きわめて高い資産価値を持っている。そしてこの評価額は更に上昇するといわれている。

世界的文化遺産としての弦楽器名器は、これを保全し次世代に継承していくことが我々の責務である。保全とは、それをできる限り現存の状態を維持するばかりでなく、その活用、即ち演奏用の楽器として使用していくことである。現存する弦楽器名器の数に限りはあるとはいえ、未だ収集家の手に眠っている楽器もかなりある。これらを世に出し演奏家の手によって美しい音楽をクラシック音楽愛好家に提供することは、クラシック音楽の発展に多大の成果をもたらすものと考えられるので当財団としては、今後とも貸与を目的として弦楽器名器の購入を進めていく所存である。

当財団の設立25周年記念日は1999年3月23日であるが、これに先立つ1998年9月に「オール・ストラディヴァリウス・コンサート」(当時当財団所有のストラディヴァリウス9挺のうち8挺をそれぞれの貸与者が演奏したコンサート)、10月に「ストラディヴァリウス・チェロ・コンサート」(前述に参加できなかったストラディヴァリウス・チェロを貸与者が演奏したコンサート)をそれぞれ財団設立25周年記念事業として実施した。この記念事業を通じて当財団の活動内容や音楽国際交流事業、特に弦楽器名器の貸与事業の趣旨と目的とが一般に広く理解されることができた。

当財団としては、今後ともさまざまな活動を通じて我が国における音楽文化の振興に努めていく必要があると考えている。

Brief History of Nippon Music Foundation

Nippon Music Foundation was established on 23 March 1974. The objective at the time of establishment was to assist the healthy inner growth of young people, who will take on the next generation of Japan, and to enrich the Japanese population in general by promoting amateur music culture in Japan.

The projects to enhance amateur music through various events such as music festivals, concerts, lecture concerts, score publishing, visiting and performing at hospitals and old aged homes, parades, loaning practice instruments, and providing practice rooms were successfully carried out for most of the first 20 years until 1994 except for the period when the office was dormant during 1989-1990.

In 1994, at the time of the 20th year anniversary, Nippon Music Foundation shifted its activity to focus on the international exchanges in music. With the official approval from the Minister of Education, Nippon Music Foundation's three main programs became (1) International Exchanges in Music, (2) Concert Activities and (3) Grants-in-Aid Program.

The new "International Exchanges in Music" program, we believe, serves as Japan's contributions towards the global music community. Historically, the classical music communities in Europe and America have nurtured and provided opportunities for many young musicians from Japan. Today, Japan has come to be recognized as one of the major economic powers of the world and, as in other areas, Japan is now expected to share the responsibilities in supporting the world of classical music. To that end, Nippon Music Foundation has appointed itself to become a custodian of the world's top-quality stringed instruments such as those made by Antonio Stradivari and Guarneri del Gesù of Cremona, Italy during the 1600-1700s. The Foundation loan these instruments gratuitously to accomplished musicians as well as to young promising musicians regardless of their nationalities. The Foundation also organizes charity concerts in various countries to share the timbre of these superb instruments with music lovers all over the world.

The "Concert Activities" program provides audiences in Japan the best quality music by world-class Japanese as well as foreign orchestras and performers at affordable prices. The Foundation believes that providing more opportunities to listen to good music will enhance the better appreciation of classical music among Japanese people.

Through the "Grants-in-Aid Program", Nippon Music Foundation gives grants to musical projects implemented by other organizations. Such musical projects include workshops to advance performing as well as teaching techniques, events to enhance international cultural exchanges as well as to promote public interests in music, and

concerts to foster charity activities through music.

All activities of Nippon Music Foundation are made possible by the generous subsidy from The Nippon Foundation. The Nippon Foundation receives its funding from the proceeds of Motorboat Racing. Nippon Music Foundation's total revenue for the 25-year period between March 1974 and March 1999 totals ¥8.42 billion (US\$71.13 million at rate of US\$1=¥118.37 as of 31 March 1999). Nippon Music Foundation is grateful that 95.6% of it (¥8.05 billion) has come from The Nippon Foundation. At the time of establishment in 1974, ¥10 million was privately donated towards the Foundation's fundamental asset by late Mr. Ryoichi Sasakawa, the founder of The Nippon Foundation.

With the firm belief that music acts as the best tool for fostering friendship among different nations in the world, Nippon Music Foundation strives to continue to expand its "International Exchanges in Music" activities. From the fund allocated to the "International Exchanges in Music" project, which commenced in March 1993, Nippon Music Foundation was fortunate to acquire 12 stringed instruments (10 Stradivarius and 2 Guarneri del Gesu) within 6 years. The total purchase price for the 12 instruments amounted to ¥5.07 billion. When the instruments were reviewed in line with the instrument market in March 1999, the replacement value for the 12 instruments totaled ¥5.76 billion. Only small number of masterpiece stringed instruments still exists in good condition throughout the world today. The experts confide that the upward trend of instrument prices will continue reflecting ever-increasing demand by the players as well as collectors. Nippon Music Foundation, as a custodian, is committed to preserving and maintaining those instruments regarded as historical cultural assets of the world in order for them to be handed down to future generations. Nippon Music Foundation will also continue to look for and to acquire such top-quality instruments in order to loan them to musicians.

To celebrate the 25th anniversary of the Foundation in September 1998, the Foundation organized "All Stradivarius Concert I & II" in Tokyo where the nine musicians who have the instruments on loan from the Foundation performed total of 9 Stradivarius instruments. These concerts were great success and the Nippon Music Foundation's philosophy of "Loaning of Stringed Instrument" activity was very well received by the audience and critics.

Nippon Music Foundation will continue to strive to promote friendship and better international understanding among peoples of different countries through music.

第一部

日本音楽財団が目指すもの

第一部 日本音楽財団が目指すもの

我が国が経済大国といわれるようになってから久しい。経済が発展し国民がその繁栄を享受した一方、環境問題・犯罪の増加・青少年の非行等々さまざまな社会問題が発生し、これらの解決が焦眉の急となってきている。経済の高度成長の過程で、所得の向上や物質的な豊かさを追求することに専心し、精神の安定を求める努力が少なかったようである。このことが、一転して経済の不況が長期化するに及び多様な社会問題の発生につながったものと思われる。精神の荒廃の理由はいろいろあることと思われるが、従来から我が国における文化活動の低さが一つ指摘されてきていた。

青少年の健全育成に当たっては、スポーツや文化の活動に幼少の頃から参加させる必要のあることがいわれてきた。いわゆる学校教育におけるスポーツや文化の習得であるが、高齢化社会の時代を迎えて、それが社会教育や生涯教育の分野にも広がってきた。スポーツや文化の活動にできるだけ多くの国民が関与することにより、その精神的な生活に意義を見出し、物質的な豊かさと相俟って、質実ともにバランスのとれた個人的・社会的生活を営める機会を増大させようとするものである。

これは音楽の世界でも同じことである。

当財団は、「次代を担う青少年の健全な育成を図るためには体の鍛錬と相俟って情操の涵養に力を入れるべきで、アマチュアの音楽運動は幼少時から音楽を通じて訓練するものであり、広く国民の音楽文化を発展させる。」という笹川良一初代会長の信念に基づき、まずアマチュア音楽の振興から活動を開始した。この活動は、幼稚園から小・中・高・大学までの学校教育での音楽や地域中心による市民音楽の振興、高齢者に対しては施設訪問演奏による音楽の提供などを含み、音楽を演奏することに喜びを感じずる人達の育成と音楽を聴くことに喜びを感じずる聴衆の育成とが目標であった。

この根本的な理念「音楽を通じての国民の情操の涵養」

は、当財団が近年、クラシック音楽を全面的に採り入れてからも全く変わらないものである。この基本理念を踏まえて、当財団は中期的に次の4点について重点的に活動を展開することとしている。

1. 社会教育の一環としてのアマチュア音楽の振興
2. 音楽分野における国際交流
3. 我が国における演奏会活動
4. 調査研究、音楽ライブラリー

1. 社会教育の一環としてのアマチュア音楽の振興

アマチュア音楽の振興は当財団設立以来の大目標である。その理念が、「音楽を通じての国民の情操の涵養」にあることは、既に述べた。幼児期、成長期、学生期そして社会人となってからの音楽との接触は、「演奏する」という立場と「聴く」という立場の2面がある。演奏するということはその程度にもよるが、誰にでもできるものではない。しかし、聴くことは誰にでもできる。それぞれが自分の好きな分野の音楽を演奏したり聴いたりすることは、自身の精神生活を安定させることに役立つであろう。幸いにして、全国の約3,300に及ぶ市町村には大なり小なり音楽ホールがあり、適切な企画さえあれば市民がそれを享受することは可能である。当財団はこのような状況を大いに啓蒙し、できるだけ多くの市民が音楽に接することのできるよう環境の整備を促進する。そして演奏する側にはその演奏技術の向上と演奏機会の増大を促し、聴く側にとっては楽しく音楽会に行ける機会の増大を図っていくべきであろう。

高齢化社会が到来し、音楽がその分野で果たすべき役割も増大してきた。従来高齢者に対しては、特別養護施設や老人ホームなどにおいて療育音楽の試みがなされてきた。歌を歌ったり、踊ったり、楽器を操作することによって、日常生活では失われつつある運動機能の回復を図り、かつグループで行うことの楽しみがその生活に潤いを与えることが証明されている。また、障害者施設やホスピス等においても音楽療法が療養や精神の安定に役

立つことも立証されている。当財団がこの分野についても関係方面と提携して取り組んでいく必要がある。

演奏会に行きたくとも行けない人々がたくさんいる。このような人達に生の音楽を聴いてもらうことは重要である。前述の高齢者施設や障害者施設、ホスピス等での施設訪問演奏は過去においても極めて重要かつ成果のあった事業である。そしてこの施設訪問演奏は訪問した施設の方々から喜ばれるだけでなく、演奏する側にとっても養護老人や障害者に対する演奏は、音楽をやっている意義の一つとしても重要である。音楽により養護老人や障害者と喜びをわかちあうことは何のために音楽をやっているのかという自己意識の向上と音楽をやっていて良かったという深い満足感が得られる。このような活動は本来ボランティアベースのものと考えられるが、それに対する必要な経費は発生する。従って、これを側面から支援する活動もまた必要であろう。

2. 音楽分野における国際交流

当財団の音楽国際交流事業の目的が、我が国の音楽分野における国際貢献を目指すものであることは前述した。このことは、国の内外からの強い要請でもあり、国際的責務でもある。1994年から始めたこの事業を当財団は今後とも益々強化していかなければならない。

1) 弦楽器名器の購入と貸与

当財団が弦楽器名器の貸与事業を開始してから、世界の音楽界におけるこの事業に対する評価は高まるばかりである。楽器の貸与を受けている演奏家からばかりでなく、世界の音楽界の指導的立場にある音楽家達からも感謝の表明が続々と届いている。これは、当財団の貸与事業が日本人演奏家だけを対象にしているのではなく国際的な規模でしかも演奏家の負担なしで行われていること、当財団が楽器の保全に最大の注意を払っていること、また楽器の貸与を受けている若手演奏家がその使用によって格段に成長していることなどの理由によっている。

近年、若手弦楽器奏者が輩出していることも相俟って、楽器の貸与需要は益々高まっている。楽器が長期貸

与に供されると少なくとも数年間は同一演奏家を使用することになるため、需要に応じて、楽器の購入を継続する必要がある。

一方、特定の演奏会での演奏、CD録音、国際コンクール出場のための貸与希望などの短期貸与の需要も激増している。現在は短期貸与用の楽器が少ないため十分な対応ができていないが、今後はその面への配慮もしていかなければならないであろう。

2) 国際交流ネットワークの形成

当財団は、国際交流事業を開始してからこれまで、欧米の音楽関係組織（8カ国におよぶ音楽院、音楽大学、国際音楽コンクール組織、音楽祭実施組織、オーケストラなど）との間でネットワークの構築を行ってきた。そしてこれらの一部の組織との間では共同事業の実施も行ってきた。

今後はこのネットワークを更に拡大し、2国間・多国間を問わず国際会議・国際シンポジウム、国際セミナー、海外演奏会等の国際的な事業を企画・実施していく必要がある。

3. 我が国における演奏会活動

現在、我が国には多くの音楽ホールがあり、数多くのクラシック演奏会が行われているが、その多くの部分が東京地域であって、それ以外の地域での有名オーケストラや演奏家の演奏は一部地方大都市を除くと極めて少ないのが現状である。各地方都市におけるクラシック人口との比較における集客能力の関係もあろうが、企画力などのソフト面での能力の不足が原因といわれている。従って、東京等で企画された優れた演奏会を地方でも実施できるようなシステムを考える必要があると思われる。当財団の貸与楽器を使用しての演奏会も地方での開催を望む声強い。

さらに、世界で一流の音楽家やオーケストラ等の演奏会は東京でも極めて高額であり、一般市民や勤労青少年あるいは学生達にとってはとても気安く視聴できるものとはなっていない。質の高い音楽を低価格で提供する演

奏会の開催は、音楽文化の普及・振興という当財団の使命に鑑み、極めて重要である。クラシック音楽愛好家の拡大と、演奏会聴衆の育成を図っていくなかで、コンサートカルチャーの普及をも図っていく。

このため、一流オーケストラ等の演奏会と当財団貸与楽器を使用してのコンサートの開催を積極的に推進する。

4. 音楽ライブラリーの整備と調査研究

当財団は音楽に携わる財団として相応しいミュージック・ライブラリーを整備し、諸種の音楽関係情報の収集とその再提供を行う体制を整えなければならない。当面、音楽資料(レコード、カセットテープ、CD、DVD等)及び音楽文献(洋書・古書・原譜面)等を収集し、希望者への利用に供する。

第二部 歴史編

「財団25年の歩み」

第一章 アマチュア音楽の振興



第二部 歴史編

「財団25年の歩み」

第一章 アマチュア音楽の振興

(財)日本国民音楽振興財団時代(1974年度－1993年度)

設立後20年間(1974年3月－1994年3月)の事業活動は、我が国におけるアマチュア音楽の振興が中心であった。学校教育の場や市民グループ等により実施されているアマチュア音楽を振興するため、演奏機会の増大、中堅指導者の養成、練習の支援、指導者の国際交流等を中心として行ってきた。対象となった音楽分野は、吹奏楽、マーチング、バトン、合唱、日本太鼓、ギター等多岐にわたっている。

事業の実施方法は、アマチュア音楽祭、創作曲コンクール、講習会・講師派遣、楽器貸与、施設訪問演奏会支援、伝統音楽公演、特別公演会、国際交流、パレード参加支援、練習施設貸与などであった。

アマチュア音楽振興事業の具体的な目的は、

- ① 音楽演奏団体の演奏機会の増大
- ② 音楽団体の演奏技術の向上
- ③ 音楽団体における指導者の養成と交流
- ④ 音楽愛好家に対する音楽演奏の提供
- ⑤ 音楽団体(特に分野の異なる)の相互交流と理解の促進、及び音楽活動の活発化
- ⑥ 作曲の奨励及び若手作曲家の育成
- ⑦ アマチュア音楽の地域社会における定着

に集約されている。実施された個々の事業をみると、それぞれにおける実績は、若干の試行錯誤や紆余曲折を経ながらも、全体的には所期の目的に沿って成果を上げているといえることができる。

アマチュア音楽をめぐる客観情勢は、財団設立時に比較すると状況はかなり好転しているものと思われる。全国各地には多くの演奏施設が整えられてきており、また各地において文化祭や音楽祭の企画が多くなされている。それに加えて国民的・市民的諸行事におけるアマチュア

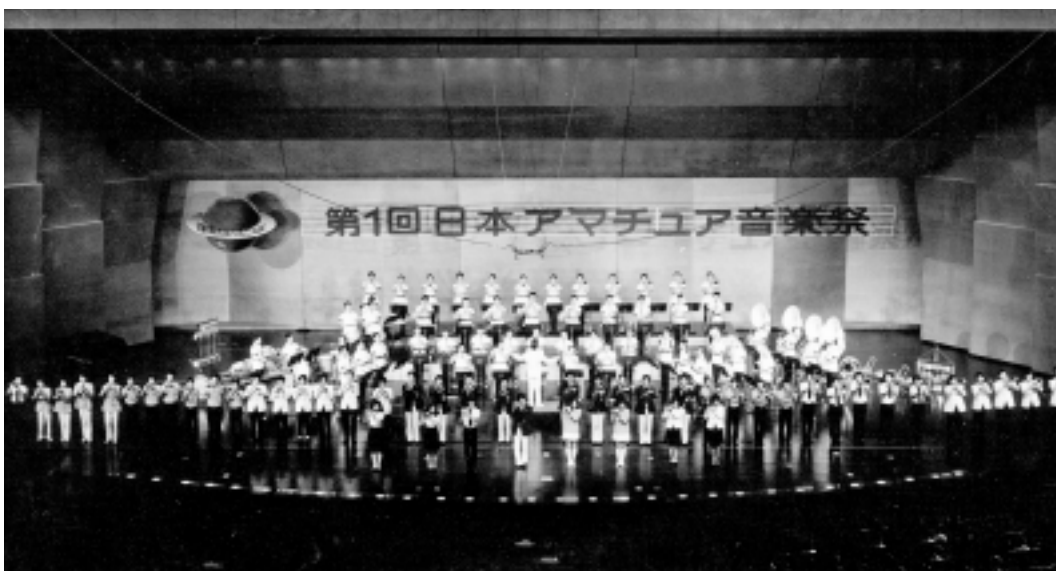
音楽の参入も日常的となっている。

以下、財団の当初20年の歴史を振り返ってみることとしたい。

1. アマチュア音楽祭の開催

本事業は、アマチュア音楽の各分野における優秀演奏団体を一堂に集めて演奏会を実施し、開催地周辺の音楽愛好家に披露すること及びアマチュア音楽各分野間の相互交流と理解を促進し、爾後のアマチュア音楽の横のつながりと広がりとを図ることを目的としていた。

アマチュア音楽界においては、特定の分野におけるコンクールや演奏会は度々行われているものの、異なった分野の演奏団体が同一の場において演奏する行事は稀である。なお、本音楽祭において対象となったアマチュア音楽の分野は、吹奏楽、マーチング、バトン、合唱、和太鼓等であった。(資料2参照)



本事業は、1974年度から1993年度まで計27回開催された。このうち1975年から1981年度の7年間は、年間2乃至4回開催されている。開催地は東京が中心になっているが、東京以外でも延べ19府県において開催されている。20年間における本事業に係わる事業費は2億1,700万円であり、同総事業費9億3,900万円の23.1%を占め、最大の事業であったといえる。



◆ 1982年3月11日付、静岡新聞より抜粋◆

【手拍子や掛け声もはいて、それはとても楽しい音楽会だった。3月10日清水市民会館で、障害者ふれあいコンサートと題した「第18回日本アマチュア音楽祭イン静岡」が、日本国民音楽振興財団と東京ミュージックボランティア協会の手で開かれ、障害者とアマチュアの音楽グループ17団体約800人が参加し、4時間半にわたるコーラスや器楽演奏を楽しんだ。この音楽会は、「音楽愛好家の育成、振興」を目的に、同財団が開いているが、音楽を機能回復に取り入れるなど、障害者の音楽療法が盛んになっていることや、国際障害者年などにちなみ、「障害者ふれあいコンサート」を特別企画した。参加したのは、障害者や精薄者施設の器楽、合唱グループや一般のコーラスグループなど17団体で、障害者と健常者が手を結んだコンサートになった。テレビでおなじみのパンチョと勝又秀子さんの司会で始まり、富士見学園(富士市)や駿豆学園(田方郡土肥町)のグループ演奏に続いて、くすの木学園(富士市)からは「親の会」が出演。器楽演奏



で「てんとう虫のサンバ」などを披露した。

力強いドラミングで始まった「和太鼓ファンタジー・オパ御殿場」は御殿場市の光雲寮の人たちが出演。浜松学園（浜松市）の子供たちも、「知代」「翼を下さい」を合唱、見事なハーモニーで聴く人を引き付けた。また、演奏の合間には、パンチョのお兄さんも「ドレミの歌」や「ハメハメハ大王」など、子供たちに人気のある曲を歌い、その都度、会場から手拍子がわき、歌声が広がった。東京ミュージックボランティア協会の赤星建彦理事長も、会場で手拍子を打つなどしていたが、午後から作曲家の浜口庫之助氏も会場に駆けつけ、音楽祭を盛り上げた。

この日のため「涙君さようなら」を練習してきた清水市の主婦たちのコーラスグループ「コール草薙」の人たちも会場で出番を待っていたが、その一人は「いろんな方たちが精一杯演奏して、とても楽しい。みんなの手拍子もとてもよいです」と話していた。】



◆ 1983年 4月 1日付、連合新聞より抜粋◆

【笹川賞創作曲コンクール10周年記念「'83春の合唱フェスティバル」が3月15日、東京五反田の簡易保険ホールで(財)日本国民音楽振興財団主催で開催された。笹川賞は、アマチュア音楽振興の一環として日本人による独自の曲を作って普及しようという趣旨により、去る昭和49年に制定され、合唱曲、吹奏楽の2部門で毎年度広く作曲を一般募集しているもので、作曲家を目指す新人の発掘にも一役買っている。毎年入賞曲の発表会を行っているが、今年は10周年ということで特に盛大な発表会になった。

会場は関係者や愛好家約2,000人で埋まった他に、ザンビア、ニカラグア、ソマリア各大使も姿を見せ、午後6時30分、小鳩くるみ、かしわ哲のコンビ司会で開幕した。まず、吉田貴壽審査委員長から今年度(57年度)の入賞者の発表、紹介が行われた後、笹川良一同財団名誉会長によって1位から3位の3人が表彰された。表彰後、入賞曲の披露に――。まず57年度の入賞曲の発表から行われ、第1位「母は太陽のように」＝田原碩作曲、第2位「秋の瞳」＝吉岡弘之作曲、第3位「序の歌」＝飯塚邦彦作曲が松原混声合唱団によって次々と披露された。つづいて10

周年記念ということで、今までの合唱曲部門第1位の作品の披露も行われ、合唱曲部門の始まった昭和52年度から各年度の第1位曲が女声合唱団コーロネスポラ、東京女声合唱団、町田市民合唱団らによって歌われた。

また、これら笹川賞入賞作品の他に、今年はヨハネス・ブラームス生誕150年に当たるのを記念してブラームス作曲の4曲その他が合唱され、フェスティバルにふさわしい盛り上がりを見せた。最後に笹川名誉会長に合唱団代表が花束を贈呈し、フェスティバルは午後10時に閉会した。】

本事業の目的を、①アマチュア音楽演奏団体の演奏機会の増大を図ること、②開催地周辺の音楽愛好家に対し、特定分野の音楽の演奏だけでなく、異なった分野の音楽を聴く機会を提供すること、③アマチュア音楽団体(特に分野の異なる)の相互交流と理解の促進により、横のつながりを図り、爾後の音楽活動の輪を広げることの3点に意義付ければ、所期の目的を十分に達成しているものと考えられる。特に、異なった分野の音楽の演奏が一堂で行われたことは、演奏側・聴衆側双方において異なった音楽に対する理解が深められたといえることができる。

近年、日本の各地域に多くの演奏会施設が作られているが、それら施設を有効に使用しての音楽行事が企画され、演奏会活動の機会が増大することが切に望まれる。



2. 創作曲コンクールの実施

本事業は、当財団の目的である「アマチュア音楽の振興」の趣旨に則り、日本人による作曲を奨励し、それらの曲をこの分野のアマチュアに普及させ、併せて新人作曲家の登竜門にしようと制定された創作曲コンクールである。

名称は、「笹川賞創作曲コンクール」。制度創設以来、当財団の実施する主要事業の一つとして、計19回を数えた。この間、入賞を機に大きく成長した若き作曲家も多く輩出しており、音楽界からも高い評価を得てきた。また吹奏楽・合唱両部門の一位入賞作品の楽譜を印刷・発行し、無料で頒布することにより当該曲の演奏の普及を図った。このため各方面から毎年期待をもって迎えられてきた。

「笹川賞」の知名度向上により外国人による問い合わせが増えたが、本作曲コンクールの目的が日本人作曲家の育成にあるため、日本人に限り応募を受け付けることを改めて確認した。「笹川賞」は回を重ねるに従い、その水準は高まりを見せ、アマチュア作曲家の育成及び受賞作品の普及に大いに役立った。



本事業は、1974年度から1993年度までの20年間において19回実施された。1974年度から1976年度の3年間は吹奏楽だけであったが、1977年度からは合唱部門が追加された。20年間における本事業に係わる事業費は約1億1,700万円であり、同総事業費の12.4%を占め、金額的には4番目の事業であるが、内容的には、「アマチュア音楽祭」、「講習会・講師派遣事業」に次ぐ3番目の事業となっている。(資料3参照)

本事業の目的を、①作曲の奨励及び若手作曲家の育成を図ること、②コンクール第1位曲の普及を図ること、の2点に定義づければ、毎回の各部門毎の応募作品が約70点に達する応募状況にあること、本コンクールが作曲を志す人々に周知されており、本コンクール入賞がかなりの価値観を持って迎えられていること、過去の入賞者の中から作曲家として独立し活躍する者が出ているとともにその音楽経歴に本コンクール入賞歴が記載されていること、などから相応の成果を上げているものと考えられる。

また、1位入賞曲の楽譜を印刷・刊行・無償配布し、その普及を図った結果、多くの演奏会においてその演奏が実現している。財団の行事においても、1976年度から1979年度の間におけるコンクール入賞新作発表会事業、1983年度におけるコンクール10周年記念演奏会事業、1991年度以降におけるアマチュア音楽祭事業等において入賞作品の演奏を行い普及を図っている。



3. 講習会・講師派遣

本事業は、アマチュア音楽団体の演奏技術の向上及び各分野の指導者養成を目的としたものである。吹奏楽、マーチング&バトン、合唱、日本太鼓、オーケストラ、ギター等が対象となっていた。又、幼児音楽指導者、療育音楽指導者に対する講習会も開催された。

講習会は財団主催の事業であり、講師派遣は地方音楽団体が主催する講習会等に講師のみをを派遣する事業で、それぞれ全国各地において数多く実施された。1974年度から1993年度までの20年間において、アマチュア音楽祭事業に次ぎ第2番目にあげられる事業であった。1980年代以降は音楽祭事業に上回る予算配分を得て事業は順調に実施された。20年間における本事業に係わる事業費は約1億4,000万円であり、同総事業費の15.0%を占めた。(資料4参照)

種類別にみても吹奏楽とマーチング&バトンが最も回数が多く、ついで日本太鼓となっている。幼児音楽及び療育音楽の指導者講習会が、1983年から1989年度の間集中的に行われていることは注目に値する。吹奏楽及びマーチング&バトンの分野では、初期の頃は演奏団体を直接指導する講習会事業が主体であったが、1980年代からは指導者養成のための講習会・講師派遣事業の比重が高まっている。これに対し日本太鼓及び合唱の分野では、講習会に参加する演奏団体もしくは個人の直接指導が主体である。

幼児音楽及び療育音楽の分野は、その性格上ほとんどが指導者の養成である。

◆1982年12月25日付、神戸新聞より抜粋◆

【プロの指導は一味違います——。NHK交響楽団などで活躍を続けている第一線の演奏家を講師に招いた交響楽全国講習会「オーケストラクリニック・イン兵庫」が加古川市の県東はりま青少年館と加古川市立少年自然の家を会場に24日始まった。受講したのは全国的にもトップレベルのアマチュアグループ「加古川ユースオーケストラ」をはじめ、同市内の平岡中学管弦楽クラブや中部中学吹



奏楽部のメンバーなど120人あまり。プロの模範演奏に耳をそばだて、五線譜に取り組んでいた。

このクリニックは、日本国民音楽振興財団が、アマチュア音楽活動の助成事業として開いているもので、県下では初めての催し。アマチュアのオーケストラや吹奏楽の盛んな加古川地区の熱心な“勧誘”が実った。

スケジュールは、この日午後から26日午後までの2泊3日。ドヴォルザークの「新世界」をテキストに、初日の24日は、パートごとの練習。吉田貴壽・日本演奏連盟常任理事(チェロ)や関根五郎・NHK交響楽団団員など我が国の演奏界を代表するメンバーが、自ら手本を示しながら、楽器の扱い方や演奏姿勢まで、事細かに指導。ユースオーケストラのメンバー尾崎文子さん(21)は「美しい音を出すための心構えを改めて指摘されました。少し演奏ができるようになってからというもの、ただハーモニーを、とと思っていましたが、ここの研鑽の大切さを教えられ、音楽の奥深さを感じました。」と頬を紅潮させ、中学生たちも講師の一言一言を聞き漏らすまいと真剣な表情。

「新世界」を奏でるのはこの日が初めてという中学生が多く、パート練習では「はい、もう一度」、「イメージと違います。もっと小さく鋭い音で」と何度も反復練習をしていたが、一時間もすると、音やリズムも合い、講師陣もにっこり。休憩時間も講師をつかまえて、という熱心さで、両会場は「新世界」一色に包まれていた。同クリニックは25日朝から全員で合奏、さらに午後はパート練習と予定がびっちり立てられており、アマチュア音楽家たちはプロのテクニックから心構えまですべてを吸収しようと張り切っている。】



◆ 1983年 3月22日付、愛媛新聞より抜粋◆

【財団法人日本国民音楽振興財団主催の「マーチング全国講習会イン愛媛」が21・22の両日、新居浜市東雲町の新居浜東高等学校を会場に県内外のアマチュア演奏者らを集めて開かれている。同財団のアマチュア音楽活動助成事業の一環。講習会は1974年から全国主要都市でマーチング、吹奏楽・管弦楽などの各分野で開かれており、内外の音楽家や著名な指導者を招き、アマチュア演奏者らの音楽知識、技術の向上や交流による研究機会の提供を目的にしている。

講師は、元航空自衛隊音楽隊長・松本秀喜氏(合奏)、元NHK交響楽団団員・三島勝浦氏(クラリネット)、同・関根五郎氏(トロンボーン)らをはじめ県内外の一流指導者15人。

21日は、新居浜市の中・高校のブラスバンドを中心に県内をはじめ香川、高知、徳島から学校、一般のアマチュア音楽団体のメンバーや指導者ら約230名が参加。午前中、松本氏が「音楽する心」と題して講演。午後からは、各楽器とマーチング、バトンの11のパートに分かれて講師の指導を受けたが、参加者らは日本のトップレベルの指導者に目を輝かせていた。】



◆ 1984年 3月19日付、北国新聞より抜粋◆

【吹奏楽のレベル向上を——と「吹奏楽全国講習会・イン能登」＝日本国民音楽振興財団主催、能登吹奏楽連盟主管、北国新聞社など後援は、17・18の両日、珠洲市の珠洲実業高校で開かれた。

一流の中央講師の指導で地域のアマチュア音楽活動と技術の向上を図るため、日本国民音楽振興財団の助成事業として行われた。講師は中央からN響団友オーケストラの関根五郎さんら、地元から金大教育学部助教授の松中久儀さんら計13人。受講生は能登地区の8高校、8中学校の生徒延べ550人が参加した。2日間にわたりフルートやクラリネット、打楽器など9つのパート別指導が行われ、最後に高校小編成“ラデツキーマーチ”、高校大編成“祝典序曲”、中学校編成“バンドのための民話”をそれぞれ合奏して練習成果を締めくくった。

閉講式の後、受講生たちは「すばらしい指導で大変勉強になった」「2日間の講習で吹奏樂がますます好きになった」とみんな大喜びだった。】

◆ 1986年11月16日付、岡谷日曜新聞より抜粋◆

【太鼓の町“岡谷”にふさわしく、第8回日本太鼓全国講習会が29日に岡谷市民会館で開かれる。日本の伝統音楽の保存、振興を目的に、財団法人日本国民音楽振興財団が主催する。

今や日本の太鼓音楽は日本人の心を伝えるものとして、海外からも大きな評価を受けている。それは、岡谷市を太鼓のふるさとにまで昇華させた御諏訪太鼓や岡谷太鼓が、ヨーロッパやアメリカ各地のイベントに招聘されているのを見てもわかる。この太鼓芸能を一層音楽的に向上させ、国民文化として、高い地歩を築き上げようというもの。

講習会は、アマチュア演奏家や指導者を対象に29日午前9時から岡谷市民会館で実技講座を行うが、午後1時から開講式の後、全国各地から選ばれた講師団体、太鼓連による模範演奏が行われる。その講師団体による模範演奏は、愛知県の尾張新次郎太鼓が「曲打ち」を。岐阜県の藤掛廣幸と安岐太鼓が「シンセサイザーと太鼓」を、千葉県の船橋ばか面踊りが「おはやし踊り」を、石川県の辰巳こんころ太鼓が「特殊打法」をそれぞれ披露する。

模範演奏に続き、会場を公民館に移して東京子供邦楽合奏団主宰の茅原芳男氏の「日本の音を子どもたちに～邦楽普及活動へのとりくみ」と題した講演が行われる。講習会は、この後会場を白樺湖畔、山幸閣に移動、翌30日にかけて、実技講習などが行われる。】

本事業の目的を、①アマチュア音楽団体の演奏技術の向上、②アマチュア音楽団体における指導者の養成、の2点に定義付ければ、その双方とも順調な成果を挙げ得たものといえる。

その後期に入り、指導者養成のための講習会実施や講師派遣に比重が移行していることは、本事業の成果を高めるためにより良い選択であった。



4. 演奏楽器の貸与・供与

本事業は、アマチュア音楽団体の主として地方組織に対し演奏用楽器を貸与しその練習と演奏の機会の増大を図る目的のものであった。その対象は、日本太鼓、吹奏楽用打楽器、伴奏用ピアノ、パレード・ユニフォームであった。パレード・ユニフォームについては、後述するパレード参加事業実施の際、並行的に実施されたものである。なお、これらの貸与楽器等は一定の償却期間を経過した後、貸与先に供与された。

本事業は、1974年度から1989年度までの16年間実施された。この間における本事業に係わる事業費は約7,900万円であり、20年間の総事業費の8.4%を占めた。その内訳は、日本太鼓63%、パレード・ユニフォーム22%、吹奏楽打楽器13%、ピアノ2%となっている。

(資料5参照)

本事業の目的を、アマチュア音楽団体における練習と演奏の機会の増大と定義づければ、相応の成果はあったものと考えられる。しかしながら、全国にあまたあるアマチュア音楽演奏団体もしくはその地方組織を対象とする限り、その対象があまりにも多すぎるが故にこの事業のもたらす効果は自ずから限られ、1990年から本事業は中止されている。



5. 施設訪問演奏会

本事業は、普段演奏会に行くことのできない社会福祉施設等の利用者に音楽を楽しんでもらうため、アマチュア音楽演奏団体を派遣し、演奏活動を行うものである。アマチュア音楽活動の地域社会に対する貢献及びアマチュア音楽を地域社会に根付かせることを目的としている。アマチュア音楽演奏団体の施設訪問演奏活動に対し交通費などの実費相当分を補助する事業である。

本事業は、1974年度から開始され1989年度まで16年間実施された。1974・1975の両年に21回実施した後、22回目からは名称を「おじゃましますコンサート」と改称、この「おじゃましますコンサート」は1988年度まで251回を数えた。この16年間における本事業に係わる事業費は約5,600万円であり、20年間の総事業費に対しては5.9%であった。(資料6参照)

参加演奏団体は吹奏楽団が圧倒的に多く、太鼓、合唱等がこれに加わっている。平均して年間15回程度の訪問演奏に支援をしていたが、多い年は30回にも達している。訪問先も老人ホーム、福祉施設、養護施設、刑務所等多岐にわたっている。



◆ 1981年10月8日付、東京七島新聞より抜粋◆

【大島、利島、新島、神津島四島の老人クラブが初めて一堂に会して「大島支庁管内老人クラブ芸能祭」を開催した。その第2部アトラクションとしておじゃましますコンサートが行われた。小鳩くるみさんの特別出演、老人ホーム黒潮楽団の演奏に乗せて、早川洋舞グループのハワイアンダンスが披露された。】



◆ 1981年10月24日付、福井新聞より抜粋◆

【体の不自由な人たちに音楽の楽しさを一福井地区消防音楽隊のOBらで作っている福井マーチングバンドが22日、勝山市の九頭竜身障者ワークショップ(五十嵐閑所長、入所生113人)で「おじゃましますコンサート」を開いた。この催しは日本国民音楽振興財団の主催で開かれたものであり、和田末雄隊長以下30名が赤い上着に白のズボンというおなじみのユニフォームで訪れた。テーブルを片づけた食堂がコンサート会場となり、車椅子や畳に陣取った入所生を前に、得意のレパートリーを披露した。日ごろ音楽に親しむ機会が少なく、まして生演奏に接したことのない入所生たちは、さまざまな楽器のハーモニーに盛んな拍手を送っていた。全部で10数曲が演奏されたが、知っているメロディには、みんなが合唱するなど、すっかり“のっていた”。】

◆ 1981年12月6日付、日刊新愛媛より抜粋◆

【日本国民音楽振興財団主催の「おじゃましますコンサート」が5日松山市権現町の盲老人ホーム権現荘と特別養護老人ホーム第二権現荘で開かれた。演奏は堀江小学校トランペット鼓隊110人。お年寄りたちは孫のような児童たちの演奏に、「一足早いクリスマスプレゼント」と大喜びだった。

このコンサートは、日ごろ生の音楽に触れる機会に恵まれない施設の人たちに生演奏の醍醐味をという目的で7年前から始まっており、今回で130回目。心温まる音のプレゼントを各地で続けている。

この日は、「サザエさん」の演奏で幕開け。お年寄りたちにも人気番組のテーマソングだけに一緒に歌う人も見

られた。続いて金管アンサンブルなどのメドレーや、「おじいさん、おばあさん、お元気ですか」と呼びかける作文も読み上げられた。お年寄りたちもお返しに、童謡、詩吟、民謡など、昔とったきねづかを披露、拍手を浴びた。

会場には、寮母さんたちの心尽くしによるクリスマスツリーが立てられ、ムード満点。「子供たちの声を聞くのが何よりの楽しみです」と、涙を浮かべるお年寄りもいた。】

◆ 1981年12月28日付、福井新聞より抜粋◆

【年の瀬のひとつき、受刑者に楽しい音楽をーとフクイニューサウンズオーケストラは27日、福井刑務所で「おじゃましますコンサート」を開いた。

このコンサートは家庭団欒のない受刑者を音楽で慰めようと日本国民音楽振興財団の主催で毎年開いているもの。年末の恒例事業としてすっかり定着し、昨年春にはこのコンサートがきっかけで刑務所内にコーラスグループも生まれた。

「チャチャチャ」のリズムに乗せて木曾節で華やかにオープニング。「マンボNo.5」や「ダンシングオールナイト」のラテン、ポピュラーナンバーから「二人酒」、「大阪しぐれ」などの演歌まで8曲を演奏。297人の受刑者から盛んな拍手を受けた。第2部は受刑者も共演。刑務所内の各工場代表がオーケストラの演奏に合わせて自慢ののどを披露した。普段歌う機会のない受刑者だが、この日は各工場の仲間の声援に送られて次々ステージに登場。本格的な伴奏をバックに「ゆきずり」や「夜霧の慕情」などの演歌を情緒たっぷりに歌い上げた。】

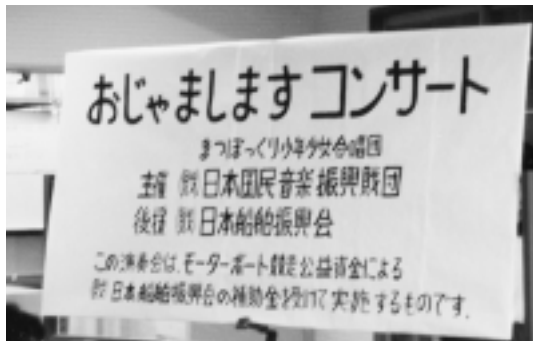


【「おじゃましますコンサート」を聴いて

多摩少年院学寮 K.S.

私が、この「おじゃましますコンサート」があるということをはじめて知ったのは、月初めに月間予定表を見たときでした。実は私は、中学校3年間と高校を退学するまで、ずっと吹奏楽部の部員だったのです。罪を犯し、その結果として少年院に入ってしまったわけですが、音楽を愛するという心だけはまだ失われていませんでした。

ですから、この演奏会があるということを知った日か



ら演奏会の日を心待ちにしていました。演奏会当日、プログラムを拝見したとき、私が吹奏楽部員であったころに演奏した曲が何曲かあるというので、どんな演奏をしてくださるのか、とても関心が湧きました。

体育館に入り、初めて楽団を見てこれだけの人数で、フルートを吹いたらどんな音が出るのだろうかということ、まず感じました。オープニングの「白い恋人たち」を聴いたとき、フルートの美しい響きに感慨無量でした。

体育館が冷えていてピッチが低くなり、音も合わせにくかったことだろうと思いますが、それでもすばらしいハーモニーでした。数曲聴いているうちに私自身が演奏をしている気持ちになり、自然に足で拍子を取っていました。ふと「私も高校に行っていれば、今ごろ毎日こうして楽器を吹いていたのだろうか」なんて思ったりもしました。全曲を聞いて、心の中はすがすがしい気持ちでいっぱいになりました。

そしてこの演奏会は、私に大きな力と決意をつけてくれました。その決意とは「私も社会へ出たら、吹奏楽をまた続け、そして、できればこの『おじゃましますコンサート』のように、奉仕の演奏会を開く」という決意です。心のこもった演奏を、本当にありがとうございました。】

◆ 1983年 3月14日付、静岡新聞より抜粋◆

【榛原郡藻本川根町の「赤石太鼓保存会」の一行17人が13日、静岡市慈悲尾の精神薄弱児施設「安部学園」（寺田亮一園長）を慰問に訪れ、勇ましい和太鼓の響きを園児らにプレゼントした。

赤石太鼓保存会は、町に芸能文化を育てていこうという佐藤正美町長の呼びかけで55年4月に結成され、雄大な南アルプスの霊峰・赤石岳にちなんで、この名前がつけられた。現在、会員は女性7名を含む30人で平均年齢は23歳。曲は郷土に伝わる歴史や自然をテーマにしたものが多く、いずれも勇壮で感動的。この日は朝から降り続いたあいにくの雨のため、同学園指導室が演奏会場となった。会場には、大締大鼓、長胴太鼓、ドラ、ホラ貝などが持ち込まれ、会員たちはねじり鉢巻に法被を纏った勇ましい姿で登場し、まず、「赤石山霊竜神太鼓」を力強

く披露した。そして記念品を同学園に贈った。この後、「本川根茶つみばやし」「大井川鉄砲流し」「小長谷城陣屋太鼓」などの赤石太鼓を勇ましい掛け声と見事なバチさばきで次々と打ち鳴らした。集まった100人あまりの園児たちは初めて聴く勇壮な太鼓の響きに驚いた様子ながらも、足でリズムを取ったり、手拍子を打つなど会場いっばいに響き渡る太鼓の音に聞き入っていた。】

本事業は、アマチュア音楽を通じての地域社会に対する貢献という観点からは、極めて有益な事業であったといえる。コンクールや音楽会参加などのような華やかさはないものの、音楽を演奏して楽しむということに加えて音楽を通じて社会貢献をしているということは、正しく草の根レベルにおけるボランティア活動であり、高く評価できる。この種の事業は療育音楽指導者研修事業などとともに今後とも続けられるべきであり、かつその広がりを求めるべきである。



6. 伝統音楽公演

本事業は、我が国の伝統音楽の保存と伝承並びに一般への普及を目的とし、それら伝統音楽の公演会を開催したものである。

第1回は那覇少年少女合唱団による沖縄音楽公演が東京で開催されたが、第2回以降は日本太鼓を中心とした伝統音楽公演として実施され、1992年度(ただし、1990・91年度を除く)まで財団の自主事業として全国各地で実施されている。1993年度については、この日本太鼓公演は全日本太鼓連盟に移行され、協賛金の支出にとどまっている。

この間における本事業に係わる事業費は約1億600万円であり、20年間の総事業費の11.3%とかなり大きい割合を占めている。(資料7参照)

◆ 1982年3月15日付、連合新聞より抜粋◆

【"ドン、ドドン、ドンドンドン"力強いリズムカルな音が会場いっぱいに鳴り響き、もろ肌脱いでバチをふる打ち手は玉の汗の熱演—財団法人日本国民音楽振興財団主催、全日本太鼓連盟主管の第8回伝統音楽公演「日本の太鼓」が3月6日、東京・虎ノ門の日消会館ニッショーホールで開催された。今回は、全日本太鼓連盟の創立3周年記



念と銘打った公演で、文化庁、財団法人日本船舶振興会などが後援した。

公演は正午、第一部の全国代表チーム発表演奏会で始まり、全国から選ばれた14チームが見事なバチさばきでそれぞれ郷土色豊かな太鼓芸能を披露し、大会ムードを盛り上げた。つづいて、午後3時から第2部の記念式典に移った。まず、笹川良一同財団会長、江崎真澄同財団理事長の挨拶の後、日本の太鼓の伝承と普及に功績のあった故平野重男(会津流梁川獅子躍)、遠藤閔三郎(美濃宮太鼓)、浅野義雄(石川県・浅野太鼓社長)の3氏が笹川会長から表彰された。また、出場チームに記念として盾が贈られ、文化庁長官の祝辞(北橋徹文化部長の代読)、吟詠静鳳流宗家笹川鎮江さんの祝歌朗詠、花束贈呈などがあって式典が終わった。

このあとは、公演のメインイベントといえる第三部の特別企画「伝統と創造」。尾張新次郎太鼓、郡上宝暦義民太鼓など4つの伝統太鼓のほか、ジョージ川口と小口大八「御諏訪太鼓」など日本の伝統太鼓にオーケストラや合唱、現代舞踊をジョイントさせた新しい趣向の4つの番組が舞台狭しと次々に披露され、会場を埋めた"太鼓ファン"をたっぷり堪能させた。】



◆ 1983年1月24日付、神戸新聞より抜粋◆

【伝統芸能の“灯”を守り続けよう——と23日、第9回伝統音楽公演「日本の太鼓・港にこだまする唄とおどり」が神戸・三宮の神戸国際会館大ホールで開かれ、全国各地から集まった12団体総勢200人が“お国自慢”の太鼓やおどりを繰り広げた。

日本人の魂をよみがえらせ、祖先の血が脈々と息づく伝統芸能も、最近のめまぐるしく変化する社会情勢の中で受け継ぐ人が年々減少している。同公演はこうした状況を憂えた「日本国民音楽振興財団」が郷土芸能を保存、復活する場を——と毎年開催。伝統的な内容だけでなく、大衆音楽としても普及させようと、リズムを現代風にアレンジした「太鼓音楽」などの“新風”も盛り込んでいる。午後2時からの公演では、港神戸に10年前に生まれた「神戸太鼓」や岩手県の「金津流梁川獅子躍」、石川県の「御陣乗太鼓」などが披露された。なかでも人気を集めたのが“ドラムの王様”ジョージ川口さんと“御諏訪太鼓”の打ち手で有名な“日本太鼓の雄”小口大八さんのソロの打ち合い。「新」と「旧」、「西洋」と「東洋」が見事にマッチして、会場を埋め尽くした約2,500人を魅了した。】

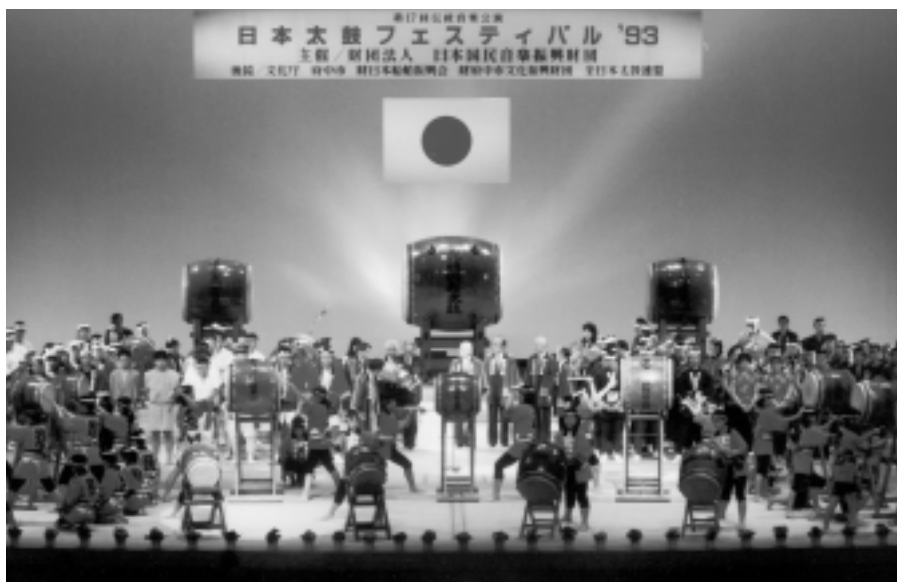


◆ 1984年3月18日付、岡谷市日曜新聞より抜粋◆

【日本各地の風土の中で培われた、伝統的な太鼓連が一堂に会しての第10回「日本の太鼓—ふるさとの伝統と創造—」が、29日午後1時から岡谷市民会館で公演される。日本国民音楽振興財団主催、信州太鼓連盟が主管。それに岡谷市民新聞社、岡谷市芸能連盟が協賛して、文化庁などが後援する。集うのは、石川県の御陣乗太鼓。埼玉県の家元秩父社中、鳥根県の掛合太鼓、愛知県の海東流神楽太鼓月星社中、千葉県の銚子獅子睦、神奈川県相模龍王太鼓、地元長野県の青木村義民太鼓、御諏訪太鼓由布姫会の8団体。それに地元芸能団体が出演、舞台に花を添える。いずれも、その土地に行かなくては聞くことも見ることもできない有名太鼓。それだけに、この画期的な競演は早くも話題を集めている。また今回はとくに特別出演でインド舞踊家シャクティ・チャクラワルティ(26)が来岡、創作「ヒミコ」を上演。ファンにとっては見逃せない舞台となっている。】

本事業では、最初の沖縄音楽公演を除いては、日本太鼓を日本の伝統音楽として位置づけた。日本太鼓に対する当財団の支援は、本事業の他にも講習会・講師派遣事業及び楽器貸与事業等の事業でも行われている。日本太鼓に関する全国組織「全日本太鼓連盟」は、1979年度に設立されたが、当財団はその事務局を引き受けるとともにその事業活動に一貫して協力を続けてきた。その後も日本太鼓は、学校教育でも取り上げられ、また地域の活性化の観点からもその活動が支持されていることもあって堅実な発展を示している。

全日本太鼓連盟も会員数の増加などと相俟って着実に力を付けてきた。1993年度においては、この日本太鼓の伝統音楽公演は、全日本太鼓連盟設立15周年記念事業として、同連盟の自主事業として初めて実施され、成功を収めた。同連盟は1997年11月、文部大臣の許可を得て、財団法人日本太鼓連盟として発足し、事業を発展させている。



7. 特別公演

1976年度に、「創作曲コンクール受賞新作発表演奏会」として発足した本事業は1979年度まで4回開催された。その後は年度毎に、マンドリン、ハーモニカ、創作曲コンクール10周年記念演奏、西洋舞踊、マーチフェスティバル、民謡、邦楽などの特別公演が行われた。実施回数は20年の間に11回であった。

この間における本事業に係わる事業費は約4,300万円であり、20年間の総事業費に対しては4.6%であった。(資料8参照)

◆1982年3月付、全日本ハーモニカ連盟作成報告書より抜粋◆

【ハーモニカは、個人的な趣味として、各地で吹いている人も多いし、小さな演奏会はかなり多く開かれていると思われるが、その実態は詳らかではない。今回のコンサートは、複音ハーモニカとしては初めての全国的なものであったので、その聴衆は広い範囲から集まった。全国各地のハーモニカの指導的な立場の人や熱心な人は、泊りがけでほとんど集まったと思われる。また、一般広告によって、コンサートを知って集まったハーモニカファンも多かった。長い演奏時間であったが、ほとんどの人が熱心に聴いてくれた。

聴衆は、一口に言って、非常に喜んでくれた。会場ではアンケート調査を実施したが、寄せられた回答からは喜びの声があふれていた。昔ハーモニカを愛好していた人たちは、今回のハーモニカのコンサートを知り、懐かしがって集まり、非常に感激してくれた。

各地の愛好者は、今まで自分一人で吹いていたが、本格的な演奏の素晴らしさに改めてハーモニカの美しさを知った人も多い。ゲストによる新しい演奏法に触れ、非常に勉強になったと感想を述べてくれた人も多い。今まで一人で楽しんでいた人も、伴奏付きやカラオケあるいはアンサンブルなどいろいろな楽しみ方を知って、意欲を持って帰った人もある。そして、このようなコンサートをまた開催してもらいたいという希望が圧倒的であった。

ハーモニカのコンサートは戦前戦後を通じ、多く開催

されてきたが、全国から最高の奏者が一堂に集まり、しかも独奏、伴奏付き独奏、アンサンブル、大合奏と、こんなに多彩なプログラムで開催されたことは初めてのことであった。特に子供たちの立派な演奏まで加わったことは、非常に効果的であった。】

特別公演事業は、作曲コンクール受賞作(吹奏楽、合唱)の発表の場として始められたが、その後その他分野の音楽にも特別公演の窓口を開いていったものである。日頃あまり馴染みのない音楽を一般の人々に紹介し、その理解と認識の向上を得るとともに、それらの音楽の普及を図るという所期の目的は達成されている。

8. 国際交流事業

本事業は、アマチュア音楽の主として吹奏楽部門における国際交流を目的として実施された。日米間及び近隣アジア諸国との学生レベルでの吹奏楽の演奏交流及び指導者交流、米国独立200年祭へのパレード参加、吹奏楽国際コンクールへの日本からの派遣などの事業が実施された。



1974年3月の財団設立直後、米国に吹奏楽指導者の派遣が行われた。1974年度には韓国との高校レベルでの吹奏楽演奏交流(韓国への派遣と韓国からの招へい)や米国、アジア等との吹奏楽指導者交流が行われた。1975年度には天理高校吹奏楽団東南アジア親善公演、1976年度の米国独立200年祭吹奏楽団パレード参加、1977年度の全国大学選抜香港親善公演、1978年度のケルクラード国際音楽コンクールへの日本代表派遣と大プロジェクトが続いたが、これを最後に国際交流事業は行われなくなった。この6年間における本事業に係わる事業費は約1億2,500万円であり、20年間の総事業費に対しても13.4%とかなり大きい割合を占めており、対象の6年間だけでみると33%にも達している。(資料9参照)

このように大きく展開された演奏団体の海外派遣事業は1979年度以降実施されることはなかった。その最大の理由は、経費がきわめて大きなものになることや実行上の様々な問題があったことが挙げられる。しかしながらその成果としては、派遣された青少年達にとっては、音楽を通じての海外の同年代の人々との交流や、音楽分野以外での異文化との交流という経験を得ることができ、国際性の涵養という観点から大きな成果があったといえよう。

多額の経費を要する事業ではあるが、否、多額の経費を要するが故に当財団のような組織がこのような事業を支援することが必要であったと思われる。



9. パレード参加事業

本事業は、吹奏楽のうちマーチングを実践することを目的として、パレードを企画し実施したものである。当初は市民行事等におけるパレードの機会がほとんどなかったため、パレードをするためのパレードの企画であったが、後には「世界らい救済年間協賛」、「交通安全推進」、「全国高校体育記念」といった目的を持った行事におけるパレードが行われている。なお、パレードの実施の際にそのために着用するパレード・ユニフォーム貸与・供与事業も並行して行われている。

本事業は、1974年度から開始され1984年度まで11年間実施された。この間における本事業に係わる事業費は約4,700万円であり、20年間の総事業費に対しては5.1%であった。当初は年に4乃至5回実施していたが、後に1乃至2回と減少した。(資料10参照)



◆1982年3月14日付、岐阜新聞より抜粋◆

【4月6日から始まる春の交通安全運動を前に13日、「'82春の交通安全大パレード」が岐阜市内の平和通りで華やかに行われた。このパレードは今春、小学校に入学する新一年生の交通安全意識を高める春の交通安全運動に賛同し、広く市民に交通安全を訴えようといわれた。

午後3時、岐阜市・美江寺公園から済美女子高チアリーダーバトクラブを先頭に出発。小・中・高校のチアリーダー、マーチングバンドのほかにも岐阜市消防音楽隊や岐阜県警音楽隊、子供会の鼓隊など20団体、約800人が参加した。パレードの最後は日本民謡研究会岐阜支部が信号に似せた三色の小旗でしめ、岐阜市民センターまでの約一時間の華やかなパレードに道行く人もしばし足をとどめて眺め、かわいいバトントワラーに声援を送っていた。】

◆1983年2月12日付、中日新聞より抜粋◆

【県下の主なブラスバンドとバトントワラーズが一堂に集まる「三重県バンド・フェスティバル」(日本国民音楽振興財団、中部日本吹奏楽連盟、中日新聞本社など主催、

日本船舶振興会など後援)が11日、津市で開かれた。同市体育館での開会式とフロア演奏、さらに市内目抜き通りのパレードなど多彩に繰り広げられ、市民から盛んな拍手を受けていた。

この催しは今回で14回目を数え、早春の名物行事としてすっかり定着。この日は昨年を6団体上回る37団体、約2,000人が参加した。開会式は午前9時5分に始まり、各参加団体代表がプラカードを先頭に入場。山田信義・県吹奏楽連盟理事長、安藤憲男・中日新聞三重総局長などがあいさつ、岡村初博・津市長が祝辞を述べた。

この後同体育館でフロア演奏・ドリルがあり、会場いっぱいには若々しい演奏、愛らしい演技が繰り広げられた。午後は快晴のもと、恒例の市中パレード。まず同体育館から同市大門の観音公園までパレードして、同公園で「バンドの誇り」「うる星やつら」よりラムのラブソング」の2曲を合同演奏した。再び国道23号線を南下して体育館へ。沿道の市民から盛んな拍手を受けた。また、空から中日新聞本社のヘリコプターが祝賀飛行。パレードに彩りを添えた。】



◆ 1984年3月26日付、岐阜新聞より抜粋 ◆

【天気が心配されたパレードも当日は快晴となり、予定通り9時45分より開会式が行われた。総勢800人20団体が参加した今回のパレードは、春の交通安全週間を前に



してのサブタイトルを掲げ、岐阜県警察音楽隊の力強いパレードから、岐阜ジュニア吹奏楽団のかわいらしいパレードまで多彩な参加団体により行われ、沿道の市民からも多くの声援がかけられた。今回のパレードの開催が地方の関係者を刺激し、恒例化してほしいという声が出るほど地域市民とアマチュア音楽を結びつける接点となった。】

本事業が計画された当時は、吹奏楽におけるマーチングを実践するパレードの機会がなかなかなかったという事情もあってパレードそのものを計画する必要があった。1980年代に入り各種の国民的、市民的行事が多くなりパレード参加の機会が多くなってきた。今後は、マーチングのみならず他のアマチュア音楽の分野においても、各種の国民的、市民的行事に積極的に参加して、地域社会に根付いたアマチュア音楽を目指すべきである。



10. 練習施設貸与事業

本事業は、練習施設の確保に悩むアマチュア音楽団体に対し、練習施設の紹介と施設利用料の補助を行うことにより、その練習機会の増大を図ろうとするものであった。

1976年度から1979年度までの4年間実施されたが、この間における本事業に係わる事業費は約260万円であり、さしたる成果を挙げられず終了した。(資料11参照)その理由は、練習施設そのものが少なく、多すぎるニーズに応えきることができなかったからである。

第二部 歴史編

「財団25年の歩み」

第二章 クラシック音楽への転換



Photo by S.yokoyama

第二章 クラシック音楽への転換

(財)日本音楽財団への改称(1994年度-1998年度)

1994年4月19日、当財団は名称を財団法人 日本音楽財団に変更した。

1994年3月23日を以って設立20周年を迎えた当財団は、クラシック音楽を中心とする「音楽国際交流事業」の構想を打ち出し、新たな事業展開を図ることとした。

これは、アマチュア音楽をめぐる客観情勢がかなり好転してきて、未だ実施されねばならない諸施策が必要だとはいえ、当財団のアマチュア音楽振興事業としては一応所期の目的を達成したと判断されたからである。

一方、クラシック音楽は、今日、世界的に広く親しまれ、普及している。我が国のクラシック音楽家も欧米を中心として世界の舞台上で認められ、活躍を遂げている。このように日本のクラシック音楽家が欧米を中心として快く受け入れられている現状に鑑み、日本としてもこの分野においてしかるべき国際貢献を行う必要がある。これは今や国の内外からの強い要請であり、日本としての責務となっている。

従って、当財団としては設立20周年を機に新たな事業展開として、クラシック音楽分野における国際貢献を果たすことを決定したものである。そしてその中心的役割が「弦楽器名器の貸与事業」である。

新機軸を打出した1994年から始まった当財団の事業は、特別演奏会、音楽助成金の交付、音楽国際交流が三本の柱となっている。

1. 特別演奏会

現在、世界で一流の音楽家やオーケストラ等の演奏会は極めて高額であり、一般市民や勤労青少年あるいは学生達にとっては高嶺の花、とても気安く視聴できるものとはなっていない。クラシック音楽愛好家の人口を増大させ、かつその質の向上を図るためには質の高い音楽を低価格でより多く提供する必要がある。また、クラシッ

クコンサートはともすれば堅苦しいというイメージが定着しているが、大人も子供も気楽に楽しんで聴くものという極く自然なイメージに作り変えていく必要もある。従って、本事業の目的は、良質の音楽を低廉な価格で一般に提供し、以ってクラシック音楽愛好家の拡大を図るとともに、コンサートカルチャーの普及を図ることにある。

本事業は1994年度から1998年度まで計6回開催された。(資料12参照)

6回の演奏会に要した総費用は約9,000万円での5年間の総事業費5億700万円の17.8%を占めた。

(1) 1994年特別演奏会

1994年特別演奏会は、5月26日に東京・サントリーホールでロリン・マゼール指揮フィルハーモニア管弦楽団の演奏によりベートーヴェン交響曲第1番／第3番「英雄」のプログラムで開催された。来場者は当財団関係のみで約1,000名であった。

世界的に著名なロリン・マゼール氏指揮の演奏会は常日頃クラシックに慣れ親しんだ者でも感動せずにはいられないといわれているが、今回、フィルハーモニア管弦楽団演奏のベートーヴェン・プログラムは更にクラシック音楽愛好家を増やす機会となった。

(2) 1995年特別演奏会

1995年特別演奏会は、5月15日に東京芸術劇場大ホールでロリン・マゼール指揮ピッツバーグ管弦楽団の演奏によりチャイコフスキー・プログラム(「くるみ割人形」より「花のワルツ」、ヴァイオリン協奏曲ニ短調作品35、ヴァイオリン独奏：ジュリアン・ラクリン、交響曲第6番「悲愴」)のプログラムにより開催された。来場者は当財団関係のみで約1,000名であった。

前年に続き巨匠ロリン・マゼール氏指揮の質の高い音楽会を開催し、クラシック愛好家のため視聴料を低価格で提供し、音楽普及を図った。欧米で見られるような来聴者同志の親睦や同伴による鑑賞が多く見受けられるようになり、日本におけるコンサートカルチャー促進の一助となった。

(3) コントラバス・レクチャー・クリニック及びコンサート

本事業は、コントラバスのフランス弓奏法とドイツ弓奏法を比較することにより、コントラバスの新たな魅力を探るという指揮者・井上道義氏のユニークな企画で実施した。

コントラバス・レクチャー・クリニックは1996年10月26日・27日に関西日仏学館稲畑ホールで、講師を今野京氏（N響奏者、フランス弓奏法）及び文屋充徳氏（ヴュルツブルグ音楽大学教授、ドイツ弓奏法）により実施。コントラバス・レクチャー・コンサートは28日に京都コンサートホール、小ホールで両講師及びピアノ伴奏児島一江女史（東京芸術大学講師）の演奏で行った。

クリニックは、プロまたはプロを目指す音大生を対象に、フランス弓奏法とドイツ弓奏法の違いを歴史的背景からわかりやすく解説し、コントラバス奏法を指導したものである。コントラバス奏法の比較に着眼点を置いたコンサート（来場者約170名）は、日本では初めての試みであった。一般には伴奏楽器として認識されているコントラバスがソロ楽器としても十分魅力のある楽器であることを証明したコンサートであった。この企画に関する継続実施の要望は関係者から多く寄せられた。また、当財団としては、関西地区でのコンサート実施は初めてであったが、企画実施を同地域の音楽関係者と共同作業で行ったことにより、当財団の今後の関西地区における活動展開の足掛かりが得られた。



(4) 「ふたつのストラディヴァリウスの夕べ」演奏会

「ふたつのストラディヴァリウスの夕べ」演奏会は、1996年12月11日に東京銀座・王子ホールで、藤原浜雄氏及び渡辺玲子女史の演奏で行われた。来場者は約300名。

当財団所有楽器のうち2挺のストラディヴァリウス・ヴァイオリン(1708年製「ハギンス」及び1709年製「エンゲルマン」)を使用し、楽器貸与者二人による演奏会であった。今回の演奏会は、楽器の製作者が同一であっても、製作年代や演奏者の個性によって、楽器の音色が変わってくるということが如実に分かる試みであり、クラシックの演奏家そして愛好家にとっても印象深い演奏会であったとの評価を得ることができた。

今回の試みは、将来、当財団が所有するストラディヴァリウスを一堂に集めて演奏会を企画する際の貴重な経験であったといえることができる。



(5) 1997年特別演奏会

1997年特別演奏会は、5月15日に東京国際フォーラム・ホールCでロリン・マゼール指揮フィルハーモニア管弦楽団の演奏によりモーツァルト・プログラム(「劇場支配人」序曲、ヴァイオリン協奏曲第5番ヴァイオリン独奏前橋汀子、交響曲第41番「ジュピター」、フィガロの結婚)により開催された。来場者は約1,400名であった。

このコンサートは当財団がオーケストラ公演を自主企画した初めてのケースとして特筆すべきものであった。音楽愛好家により質の高い音楽を低価格で提供した。来場した聴衆からは次回の開催と継続した開催要望が多々寄せられ、クラシック音楽愛好家の拡大に貢献した。

なお、当日は皇太子殿下・同妃殿下並びに高円宮殿下・同妃殿下のご臨席を賜ることができた。

(6) オール・ストラディヴァリウス・コンサート

オール・ストラディヴァリウス・コンサートは、1998年9月8日に東京オペラシティ・コンサートホールにおいて、当財団設立25周年記念事業の一環として、当財団所有の8挺のストラディヴァリウス弦楽器を当該楽器の貸与を受けている演奏家(但し、徳永二男氏は客演)が演奏するという画期的かつ我が国初の企画で誕生した。

演奏家は、東京クワルテット(ミハイル・コペルマン氏、池田菊衛氏、磯村和英氏、原田禎夫氏、使用楽器はパガニーニ・クワルテット)、ニコライ・ズナイダー氏(1708年製ハギンス)、渡辺玲子女史(1709年製エンゲルマン)、樫本大進氏(1722年製ジュピター)、徳永二男氏(客演、1736年製ムンツ)の8名とピアノ伴奏の林絵里女史であった。



当財団はこの事業を財団設立25周年記念事業と位置づけ、ストラディヴァリウス8挺を一堂に集め、質の高い音楽を引き続き低価格で提供した。演奏会のテーマはストラディヴァリウスを前面に打ち出し、演奏曲目は親しみやすい小曲を選んだことから来場者はクラシック音楽により親しむことができ、来場した聴衆からは催しの継続開催要望が多々寄せられ、クラシック音楽愛好家の拡大に貢献した。同時にこの演奏会の実録CDを作成し財団の広報活動の一環として配布した。

なお、当日は美智子皇后陛下のご行啓を賜ることができた。



2. 音楽助成金の交付

日本における各種音楽団体は、それぞれの分野で音楽活動を行っているものの、いずれも組織力、資金面で制約があり、十分な活動が行えない事情がある。

当財団は、これらの音楽諸団体の活動を支援し、音楽水準の向上を図るとともに、音楽の振興と普及とを目的として、音楽団体の実施する事業に対し、1994年度から助成金の交付を開始した。

1993年度までは、「講師派遣」事業として、マーチング、バトン、吹奏楽、コーラス、日本太鼓の5分野のアマチュア音楽団体への講師派遣のみを行っていたが、「音楽助成金交付」制度が創設された1994年度からは援助対象を音楽事業一般に広げた。しかしながら予算上の制約もあって当面は、従来の方針を踏襲せざるを得なかった。



その後、予算の拡大に伴い室内楽分野を加え、更に、かねて懸案であったオーケストラやガラ・コンサート等への支援が可能となった(但し、日本太鼓については1997年に日本太鼓連盟が財団法人として独立したことから当該財団に移管することとした)。また、従来アマチュア音楽を対象が限定されていたものを、プロ、特に若手音楽家の育成

の分野にも拡大するようになった。これら対象案件の選定に当たっては、演奏機会の増大、演奏技能の向上、中間指導者の育成、国際交流、ボランティア活動等を指針として重視した。

本事業の1994年度から1998年度までの5年間に要した総費用は約7,500万円でこの5年間の総事業費5億700万円の14.8%を占めた。

この5年間の実績を分野毎にまとめると、資料13のとおりである。

当財団が、プロ・アマチュアを問わず音楽関係団体の行う音楽活動に対して積極的に対応している結果、各分野の団体からの助成依頼が確実に増加している。資金面で援助希望団体全てに応えることができないという制約もあることから、前述の指針を設け、事業運営委員会において希望団体のプロジェクトを選定している。継続事業においては、更に充実した内容と当該団体の事業成果の評価を判断基準としている。新規事業については幅広い音楽ジャンルからの申込及び東京以外の各地の団体からの申込が増加しているため、慎重に事業の内容、企画及びその成果の波及の程度を勘案し、効果的な資金援助をすべく選択を行っている。

事業を実施した団体からの報告によれば、助成金を交付した各団体においては、事業の継続実施が可能となり、あるいは新たな事業の実施によりその活性化が図られている。そしてそれぞれの団体がその目的達成に向けてより充実した活動を行っており、更なる飛躍が期待できる。

音楽関係者からは今後一層の助成活動の強化を期待する声が強くなってきている。

3. 音楽国際交流事業

(1) 弦楽器名器の購入・貸与

弦楽器の名器は、17世紀後半から18世紀半ばにイタリアのクレモナ地方でアントニオ・ストラディヴァリやバルトロメオ・ジュゼッペ・ゲアルネリ（通称デル・ジェスといわれる）が製作したものが最高のものといわれている。

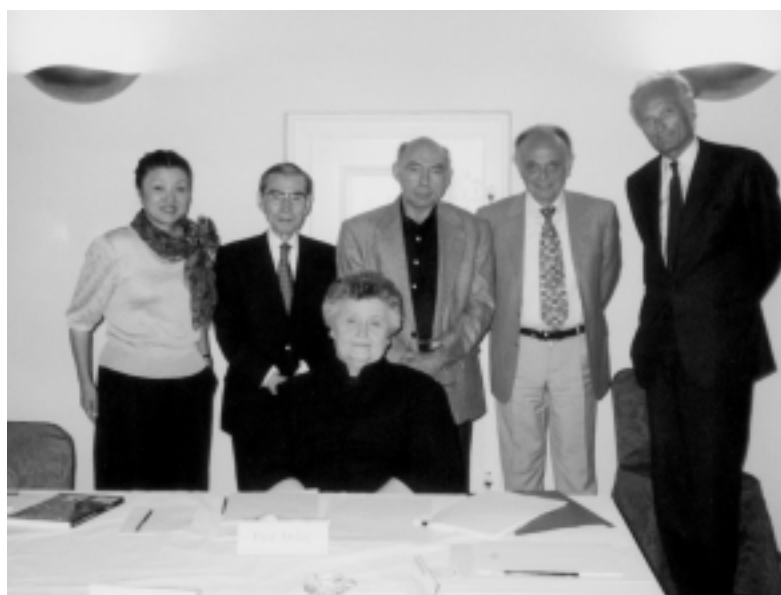
クレモナ市当局の国印付文章の中、現存する上記の楽器は、ストラディヴァリウスが450挺（うちヴィオラが12挺チェロが約50挺、残りがヴァイオリン）。デル・ジェスは、ヒル商会発行の文献によると、おおよそ140挺といわれている。

当財団が20周年を迎えた1994年から購入を開始し、貸与に供している弦楽器名器は、1999年3月末現在でヴァイオリン9挺、ヴィオラ1挺、チェロ2挺の合計12挺となっている。このうち10挺がストラディヴァリウ



スであり残り2挺がデル・ジェスである。(資料14参照)

楽器貸与に関しては、国際的規模の楽器貸与委員会を設置し、楽器購入・貸与の基本方針、並びに楽器の貸与者の決定を行っている。貸与委員には、欧州代表としてロリン・マゼール氏(指揮者)及びジャン・ピエール・デ・ラオノア伯爵(ベルギー・エリザベート・コンクール理事長)、米国代表としてドロシー・ディレイ女史(ジュリアード音楽院教授)及びヤーノシュ・シュタルケル氏(インディアナ大学教授)、日本代表として吉田貴壽氏(昭和音楽大学学長)及び塩見和子女史(日本音楽財団理事長)の6氏に委嘱している。委員会は1995年から毎年1回開催されている。



委員会は1995年から毎年1回開催されている。

楽器貸与委員会では、当財団が購入する名器はストラディヴァリウスやデル・ジェスなどの一流楽器にすべきであるとの結論が出されている。その理由は、これらの一流楽器は極めて高価であり音楽家個人では入手が困難であること、そして世界的文化遺産として保存し後世に引き継ぐに相応しい楽器であるからである。

更に、楽器の購入基準として、①来歴が明確であり真贋の問題がない、②保存状態が良い、③演奏に向いている、④世界的文化遺産として保存し後世に継承していく価値がある、⑤価格が適正であることなどが確認されている。

Instrument Loan Committee

楽器貸与委員会

Lorin Maazel

Conductor (Europe)

Comte Jean-Piere de Launoit

President, The Queen Elisabeth International Music Competition, Belgium (Europe)

Dorothy DeLay

Professor, The Juilliard School (U.S.)

Janos Starker

Professor, Indiana University (U.S.)

Kazuko Shiomi

President, Nippon Music Foundation (Japan)

[所有楽器] (購入順)

● ストラディヴァリウス「パガニーニ・クワルテット」

Paganini Quartet

1994年2月に米国コーコラン美術館とストラディヴァリウス「パガニーニ・クワルテット」の購入契約を締結し、4月28日、財団事務所において楽器を受領した。



アントニオ・ストラディヴァリは、(1644-1737) 17世紀後半から18世紀前半にかけてイタリア・クレモナ地方で活躍した名弦楽器製作者で、このクワルテットは彼の製作による弦楽器。19世紀におけるイタリアの卓越したヴァイオリン奏者ニコロ・パガニーニがクワルテット演奏に相応しい4挺を収集し、所有し演奏していたところからこの名前がつけられた。このクワルテットは、1680年製ヴァイオリン、1727年製ヴァイオリン、1731年製ヴィオラ、1736年製チェロにより編成されている。

このクワルテットのうち1727年製ヴァイオリンは1995年2月から3月にかけて韓国系米国人サラ・チャン女史に短期貸与された。

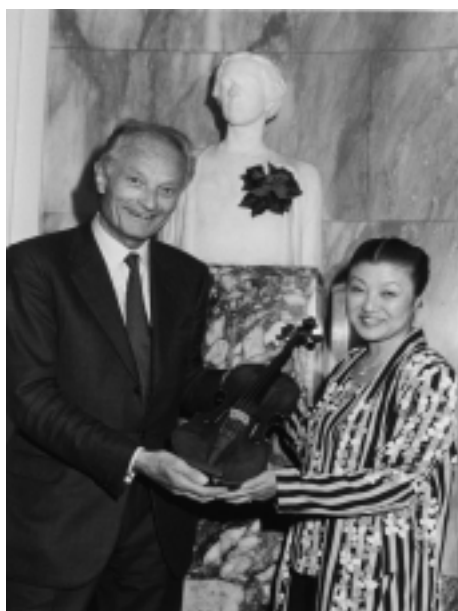
クワルテットそのものは、1995年9月以降世界的に著名な東京クワルテット(第1ヴァイオリン、アンドリュウ・ドウズ氏、1996年11月からミハイル・コペルマン氏、第2ヴァイオリン池田菊衛氏、ヴィオラ磯村和英氏、チェロ原田禎夫氏)に長期貸与されている。この間、ピオラは1997年8月下旬から9月上旬にかけてシュロモ・ミンツ氏に特別演奏会での使用のため短期貸与された。



● ストラディヴァリウス 1708年製ヴァイオリン

「ハギンス」 Huggins

アントニオ・ストラディヴァリが1708年に製作したヴァイオリンで、1880年頃英国の著名な天文学者であるウィリアム・ハギンス卿が所有していたことから「ハギンス」と呼ばれている。一般的に、1700年頃から1728年頃まではストラディヴァリの「黄金期・円熟期」と呼ばれ、もっとも優れた作品が製作されたといわれている。「ハギンスはその頃の典型的なストラディヴァリの作品であり、第一級の音色を持つ。(1919年アルフレッド・ヒル氏鑑定書簡による)」この楽器の素晴らしい保存状態から判断して、楽器の価値を熟知した歴代の所有者により、今日まで大事に取り扱われて来たことがわかる。1995年3月に英国の楽器商を通じ所有者ヴァイオリニスト、チャー・リヤン・リン氏から購入した。



この楽器は、指揮者ロリン・マゼール氏により1996年1月17日NHKホールにおいて開催されたニューイヤーコンサートで披露演奏された。その後、1996年2月から5月にかけてヒラリー・ハーン女史に短期貸与された。

1996年の楽器貸与委員会において、この楽器はベルギー・エリザベート王妃国際音楽コンクール・ヴァイオリン部門優勝者に4年間づつ貸与することが決定された。同年10月22日、折しも来日中のベルギー国王アルベール2世・パオラ王妃両陛下にその旨のご報告を兼ねて、藤原浜雄氏(1972年度同コンクール3位入賞者)の演奏によりベルギー大使館において御前演奏を行った。また、12月11日の「ふたつのストラディバリウスの夕べ」(当財団主催演奏会)における同氏の演奏をはじめ、リサイタル17回、CDレコーディング1回のため、1996年10月から1997年4月まで藤原浜雄氏に短期貸与した。



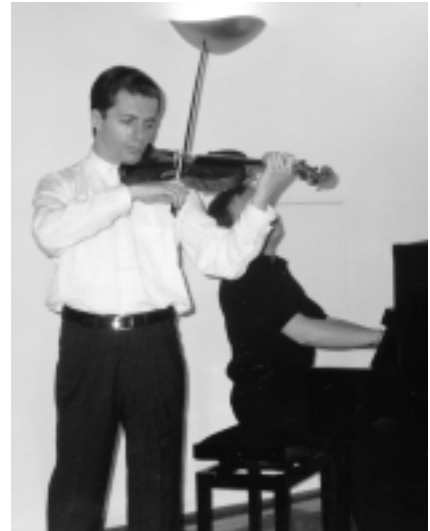
1997年5月開催のベルギー・エリザベート王妃国際音楽コンクールのヴァイオリン部門においてニコライ・ズナイダー氏が優勝したので、予定通り次期コンクール2001年までの4年間、同氏に貸与することとした。

● **ガアルネリウス・デル・ジェス 1736年製ヴァイオリン**
「ムンツ」Muntz

18世紀前半にイタリア・クレモナ地方で活躍した弦楽器製作者であるバルトロメオ・ジュゼッペ・ガアルネリ(1698-1744)が1736年に製作したヴァイオリン。彼は、アントニオ・ストラディヴァリに並ぶ最高級の製作者といわれ、「デル・ジェス」として知られている。英国のムンツ氏が一時所有していたところからこの名前が付けられた。

1995年3月に米国の楽器商ジャック・フランセ氏から購入した。

この楽器は、1995年4月から1997年7月までアン・アキコ・マイヤース女史に長期貸与され、同女史は演奏活動にこれを使用した。その後1998年3月からロシア系ヴァイオリニスト、パベル・バーマン氏に長期貸与されている。



● **ストラディヴァリウス 1709年製ヴァイオリン**
「エングルマン」Engleman

アントニオ・ストラディヴァリが1709年に製作したヴァイオリンで、1996年5月に英国の楽器商を通じ所有者E.P.エングルマン博士から購入した。この楽器は、海軍士官ヤング中佐家に約150年間大切に保管・所有された後、米国在住のエングルマン博士の手に渡った。「この楽器はストラディヴァリの作品の中でも最高級に属するもので、その音色も群を抜いている。(1915年フィリップ・ヒル氏鑑定書簡による)」音色とともに、楽器の保存状態も稀なほど良好。前の所有者の名前から「エングルマン」と呼ばれている。

このヴァイオリンは1996年8月からニューヨーク在住の渡辺玲子女史に長期貸与されており、同女史は演奏活動に使用するとともに当該楽器を使用して、1997年に初のCDデビューをジュゼッペ・シノーポリ指揮ドリスデン・シュターツカペレと果たし、次いで1998年に2枚目のCD「マイ・フェイヴァリッツ」を作成し、内外の好評を得ている。





● ストラディヴァリウス 1730年製チェロ

「フォイアマン」 Feuermann

アントニオ・ストラディヴァリが製作したといわれる約80挺のチェロのうち、1730年に製作された楽器である。普通のチェロと比べ、楽器本体の部分が細長い形が特徴。1930年から世界的に著名でかつ日本とも縁も深いスイス在住のチェリスト、エマニュエル・フォイアマン氏(チェリスト故斎藤秀雄氏の恩師)が長年にわたり演奏活動に使用したところから、現在の呼び名がついている。チェリスト、アルド・パリゾー氏から1996年12月に購入した。

1998年1月以降英国のチェリスト、スティーヴン・イッサーリス氏に長期貸与されている。

● ストラディヴァリウス 1736年製ヴァイオリン

「ムンツ」 Muntz

アントニオ・ストラディヴァリが1736年に製作したもので、楽器内部に貼られたラベルにはストラディヴァリ本人の手書きで「92歳の作品」と書かれている珍しい楽器である。ストラディヴァリが追い求めた音色を持つといわれる最後の楽器として知られている。透明な黄褐色のニスに楽器ほぼ全体に綺麗に残っており、楽器の保存状態も音色も格段に優れているため、大変貴重なものである。1874年以降、英国の収集家、ムンツ氏が所有していたため「ムンツ」と呼ばれている。1997年7月に米国の楽器商を通じ所有者ハワード・ゴトリブ氏から購入した。

この楽器は演奏会や録音のための短期貸与用に供している。これまでの貸出実績は、檜本大進氏(1997年12月から1998年2月、2月17日開催ロン・ティボー国際音楽コンクール・グランド・ガラコンサート及び2月27日開催読売日本交響楽団定期演奏会)、徳永二男氏(1998年8月から9月、9月8日開催当財団主催オール・ストラディヴァリウス・コンサートに客演)、小林響女史(1998年9月から12月、12月11日開催フランス国立放送フィルハーモニック管弦楽団コンサート)、庄司紗矢香嬢(1998年12月から1999年3月、3月6日開催東京交響楽団コンサート)であった。



● **ガアルネリウス・デル・ジェス 1740年製ヴァイオリン**
「イザイ」 Ysaye

バルトロメオ・ジュゼッペ・ガアルネリ(デル・ジェス)が1740年に製作したヴァイオリン。この楽器は歴史的に最上級のコンサート楽器として知られている。信託財団(米国)より1998年3月に購入した。

この楽器は、世界音楽界の重鎮であるアイザック・スターン氏に演奏委託されている。

● **ストラディヴァリウス1722年製ヴァイオリン**
「ジュピター」 Jupiter

アントニオ・ストラディヴァリが円熟期の1722年に製作したヴァイオリンで、長年に亘り五嶋みどり女史が演奏していたが、1998年5月に米国の楽器商を通じ所有者林原財団から購入した。この楽器の保存状態は素晴らしく、最も傷つきやすい楽器の縁部分は全て製作時の素材のままであり、オリジナル・ニスも全体に十分残っている。

この楽器は、1998年6月以降、樫本大進氏に長期貸与されている。

● **ストラディヴァリウス1716年製ヴァイオリン**
「ブース」 Booth

アントニオ・ストラディヴァリが1716年に製作したもので、1999年3月に英国の楽器商を通じ所有者イオナ・ブラウン夫人から購入した。このヴァイオリンは、コンサート楽器として世界各国にて幅広く演奏されていたため、音色の美しさと音の力強さにおいて知名度の高い楽器であり、その上、保存状態も全体的に優れている。

1855年に英国のブース夫人が息子たちのためにストラディヴァリウスのカルテットを編成しようと試み、この楽器を購入したため、現在の名前が付いている。

1999年3月以降ドイツ人ヴァイオリニスト、ヴィヴィアン・ハグナー女史に長期貸与されている。



(2) 演奏会の開催等

1) 国内演奏会

当財団は、その所有楽器を貸与事業に供するとともに、楽器の妙音を国内で一般に披露するための演奏会活動を行っている。

1994年6月3日には、パガニーニ・クワルテットを購入したことを発表する記者会見を開催、併せてその披露演奏会を港区南麻布の米荘閣で開催した。演奏は名指揮者でありヴァイオリニストでもあるロリン・マゼール氏が第1ヴァイオリンを担当、フィルハーモニア管弦楽団首席奏者達が第2ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロを担当し、曲はブラームス作曲弦楽四重奏曲第2番であった。我が国の政・財・官のオピニオン・リーダー約120名の招待客が、マゼール氏が何十年振りにヴァイオリンを演奏するという珍しさと相俟って、由緒ある楽器「パガニーニ・クワルテット」の妙音を楽しんだ。



次いで、1996年1月17日には、ロリン・マゼール氏指揮・バイエルン放送交響楽団の「ウィーンナーワルツの夕べ」と題するコンサートがNHKホールにおいて開催された。この日のプログラムは1月1日ウィーンにおけるニューイヤークンサートと同じプログラムであり、指揮者ロリン・マゼール氏が当財団所有のストラディヴァリウス・ヴァイオリン1708年「ハギンス」を使用して演奏した。演奏曲はヨーゼフ・シュトラウス作曲「ナスワルドの娘」と「踊るミューズ」で招待客は700名であった。

この楽器「ハギンス」は、前にも述べたとおり1997年からベルギー・エリザベート王妃国際音楽コンクール・ヴァイオリンの部門優勝者に次期コンクールまで4年ずつ貸与することが決定された。1996年10月22日には、折から国賓として来日中のベルギー国王アルベール2世・パオラ王妃両陛下に報告するとともに、併せて御前演奏を行った。両陛下とも当財団の事業に対しご理解を示され、特に楽器貸与事業に関しては、感謝の意を表された。



後日、ベルギー大使館においての晩餐会では、我が国の天皇・皇后両陛下より、当財団の貸与事業が国際友好促進のため役立っているとお言葉を親しくいただきました。ベルギーにおいても同コンクールへのヴァイオリン提供はTV報道もされ、国際的な話題となった。



1997年10月19日には、「パガニーニ・クワルテット」を貸与している東京クワルテットの当財団主催による演奏会が、東京・草月ホールにおいて美智子皇后陛下をお迎えして開催された。来場者は400名であった。この演奏会は当財団所有の楽器の貸与者による初めての演奏会であり、しかもその貸与先が東京クワルテットであったということで極めて話題性の高いものであり、その演奏は視聴者の感動を十分に得るものであった。

当財団が1996年12月に購入し、楽器に必要な修理を行った後、1998年1月以降英国のチェリスト、スティーヴン・イッサーリス氏に長期貸与しているストラディヴァリウス1730年製チェロ「フォイアマン」の演奏会が東京・浜離宮朝日ホールにおいて1998年10月26日に行われた。演奏者は勿論スティーヴン・イッサーリス氏。このコンサートは、特別事業として実施した前述の「オール・ストラディヴァリウス・コンサート」(9月8日開催)に出演できなかったスティーヴン・イッサーリス氏が10月に来日したことを機に開催したものである。従って、当財団の25周年記念事業「オール・ストラディヴァリウス・コンサート」の続編として位置づけて実施し、併せてCD製作も行った。イッサーリス氏の卓越した演奏技術と音楽性並びに使用しているガット弦の美しい音色と相俟って、聴衆の感動を呼び、財団の楽器貸与事業の周知およびクラシック音楽の普及にとって大きな成果をもたらした。



この他、財団の主催事業ではなかったが、1997年10月27日にサントリーホールで開催された渡辺玲子リサイタル(ストラディヴァリウス・ヴァイオリン「エンゲルマン」貸与者)、1997年12月27日に王子ホールで開催されたニコライ・ズナイダー日本デビュー・リサイタル(ストラディヴァリウス・ヴァイオリン「ハギンス」貸与者)、1999年3月27日東京オペラシティ・コンサートホールで開催された榎本大進バースデイ・コンサート(ストラディヴァリウス・ヴァイオリン「ジュピター」貸与者)等の事業に支援した。

2) 海外演奏会

当財団の所有する弦楽器名器を国際的に貸与する事業は、欧米の音楽界には広く知られているところであるが、これを更に欧米のオピニオンリーダーに周知することの必要性が認識されてきた。日本財団並びに関連の海外法人の協力を得て、楽器貸与者の居住地を中心として演奏会を開催し、当該国と我が国間の友好促進を図るとともに、当財団の楽器貸与事業を通じての我が国の国際貢献を当該国有識者に周知広報を行うこととなった。

その初めての試みが、1999年3月7日、英国王立音楽院デュークホールにおいて、グレイトブリテン・ササカワ財団、英国王立音楽院の協力の下に実現した。演奏者はストラディヴァリウス・チェロ「フォイアマン」の貸与を受けているスティーヴン・イッサーリス氏。英国において著名な音楽家であるイッサーリス氏の演奏は聴衆の感動を呼んだ。ウィルソン夫人(故ウィルソン元首相夫人)やショルティ夫人(指揮者の故ゲオルグ・ショルティ卿夫人)等も来場され、当財団の試みを賞賛された。質の高い音楽が如何に人々の心を打つものかが如実に証明される音楽会であった。また、日英交流の実が挙げられ、かつ王立音楽院とのネットワークを確実なものにすることができ、更には本来の目的であった当財団の貸与事業が理解されたことは最初の試みとして大成功であった。

3) 日本太鼓海外公演に対する支援

当財団は、設立以来アマチュア音楽振興の立場から我が国の伝統芸能のひとつである日本太鼓の普及・発展に尽力してきた。1994年に当財団がクラシック音楽事業に転換した以降も、日本太鼓に関しては任意団体である全日本太鼓連盟の事務局を引き受け、その法人化を推進する立場にあった。同連盟の法人化に関しては、当財団が日本財団に要請しその支援を受けることができ、更に文部省の許可を得て1997年11月に財団法人日本太鼓連盟の設立までこぎつけることができた。それまでの間、当財団は全日本太鼓連盟の事業に全面的な協力を行った。この期間に当財団の行った全日本太鼓連盟に対する海外事業面での協力は次のとおりであった。

1995年11月15日から約半年間、ワシントンのスミソニアン研究所国立自然史博物館において「一竹辻が花着物展」が開催されるに当たり、その開会式に日本太鼓公演の依頼を受けた。このため1995年11月12日から20日にかけてワシントンに秋田県の大曲太鼓道場のチームを派遣した。演奏は11月15日の開会式及び18日の博物館友の会演奏会の2回にわたり行った。また、14日には在米日本大使公邸における米国政府公官夫人、在米外国大・公使夫人等を招待しての栗山大使夫人主催のサロンにおいて特別公演を行った。いずれの演奏も大好評を博し、日本の伝統文化の紹介と日米交流の促進に貢献した。

次いで、国際交流基金の要請により、タイ、ラオス、ミャンマー及びインドネシア4カ国における文化交流事業に参加するため、1995年11月21日から12月10日にかけて山形県の和太鼓“龍”チームを現地に派遣した。各地における日本太鼓の人気は高く、それぞれの地における文化交流及び国際交流の目的を十分に果たすことができた。特にミャンマーにおいては、文部大臣をはじめ政府高官の多大なる歓迎を受けた。

1996年には、日本とルーマニアの友好推進を図る日本ルーマニア協会がルーマニアの首都ブカレストにおいて「ジャパン・ウィーク」を開催することになり、日本



文化を紹介するため、当財団に対し日本太鼓チームの派遣協力を要請してきた。よって、1996年8月25日から9月3日にかけてルーマニアに大分県「ゆふいん源流太鼓」チームを派遣した。公演は8月26日のブカレストをはじめ、3回にわたり行われた。いずれの演奏も大好評を博し、特に大統領ご臨席の演奏では、日本の伝統文化の紹介と二国間の交流促進に貢献したと高く評価された。



1997年には、財団法人ブルーシー・アンド・グリーンランド財団から、海外体験航海第20回「少年の船」への日本太鼓チーム派遣の依頼を受けた。当財団は、その趣旨に基づき日本太鼓・埼玉県「秩父屋台囃子保存会」(中・高校生選抜チーム)を1997年7月22日から29日までグアム・サイパンに派遣した。中・高校生を対象とした「少年の船」での船内活動の一環としての日本太鼓の派遣は、船内活動はもとより、寄港地の親善交流会においても日本の伝統文化紹介と相互間の交流促進に貢献した。

同1997年に駐日英国大使から、在日英国大使館における「日本太鼓特別公演」への協力依頼があった。同公演は1997年11月18日に在日英国大使館で行われ、当財団は英国から来日中の、英国人日本太鼓チーム「無限響」、並びに同チームを指導している福井県「響太鼓」を派遣した。加えて、英国大使館職員チーム「番町祭り太鼓」の参加もあった。同公演には高円宮殿下・同妃殿下のご臨席があり、大変盛り上がった。各団体の演奏は、日本の伝統文化の紹介と2国間の交流促進に貢献したと高く評価された。

4) その他

1994年8月31日、WWF(世界自然保護基金)オーストリアは、ザルツブルグ・フェスティバルを機にロリン・マゼール指揮、ピッツバーグ交響楽団によるチャリティ・コンサートをオーストリア国ザルツブルグ市の祝祭大劇場において開催した。当財団はこのコンサートの実施に関しWWF(世界自然保護基金)オーストリアを支援した。

演奏会事業とは直接的な関係は無いが、海外での音楽祭やチャリティコンサートにも当財団は密接な係りを持った。以下その一例を紹介する。

1995年11月9日・10日の両日、ザルツブルグ・フェスティバル音楽総監督ジェラルド・モルティエ博士は、次回フェスティバルに係わる日本人オペラ関係者との打ち合わせ並びに将来における同フェスティバルの日本開催の可能性調査のため、日本を訪れた。同氏並びにフェスティバル実行委員会は、同氏訪日目的達成のため日本における記者会見の開催方について在日オーストリア大使館並びに当財団に協力方を要請してきた。当財団はオーストリア大使館と協議の上、これを受け入れることとし、その準備を進めた。記者会見は在日オーストリア大使館において行われ、引き続き、オーストリア大使主催(当財団協力)歓迎レセプションが大使公邸において開催された。同レセプションは外国大・公使、財界、官界、報道関係、関係団体等約100名が参加し、和気藹々のものとなり、同博士一行は所期の目的を達成して帰国することができた。

毎年オーストリア・ザルツブルグで開催されるイースター・フェスティバルは、世界でも最高峰の音楽祭のひとつとして上げられている。日本財団は1996年に30周年を迎えた同フェスティバルを支援することとなった。フェスティバル事務局(カラヤン財団)との細部にわたる事務手続き等については、当財団が全面的に協力した。引き続き1997年にも日本財団は同フェスティバルを支援することとなったので当財団は同様の協力をした。因みに1996年の同フェスティバルは4月8日から17日まで、1997年は3月22日から30日まで開催された。



欧・米・亜・豪からの大学就学前の音楽学生を対象とした音楽教育活動を行っているパールマン音楽プログラム(米国非営利組織)を支援する目的でチャリティ・コンサートが米国・バージニア州“Castleton Farm”において1998年10月10日、11日の両日開催された、当財団はこれを主催したシャトーヴィレ財団に対し支援した。当該チャリティ・コンサートの収益金はパールマン音楽プログラムへ全額寄付された。

第三部

歴代役員及び評議員

当財団の設立時(1974年3月)から1999年3月までの25年間における役員及び評議員の方々は、以下にご紹介するとおりである。既に物故された方もあるが、また20年もの永きに亘り役員を勤めていただいた方々もおられる。アマチュア音楽関係の役員の中には、当財団事業の実施そのものに献身的に参加された方々もおられる。そ
のご指導、ご尽力に対し心より感謝申し上げる次第である。

ここでのご紹介は、役職別、就任・退任順とし、敬称は省略させていただいた。ご当人の他団体の役職については、現職役員・評議員については1999年3月時点のものを使用し、退任された役員・評議員については就任当時のものを使用させていただいた。

会 長

初代・名誉会長 笹川 良一

(財)日本船舶振興会 会長

1974年3月、当財団の設立と同時に初代会長に就任。

1978年10月に退任されたが、その際、名誉会長を委嘱され、亡くなられた1995年7月17日までその職にあられた。



第2代 江崎 真澄

衆議院議員

1974年3月、当財団の設立と同時に理事長に就任。

1978年10月、笹川会長の後を継いで第2代会長に就任。

1992年3月に退任された。



第3代 首藤 堯

(財)地方財務協会 会長

1992年5月、第3代会長に就任。

現在に至る。



副会長

- 加藤 尚 福井放送(株)社長
1974年3月から1977年5月まで在任。
- 神納 照美 日本吹奏楽指導者協会会長
1974年3月から1987年9月まで在任。
- 宗 道臣 日本少林寺拳法連盟理事長
1974年3月から1980年9月まで在任。
- 前田 義徳 元NHK会長
1975年5月から1984年12月まで在任。
- 鹿海 信也 元文化庁文化部長
1979年5月から1997年6月まで在任。
現在は、顧問に委嘱されている。

理事長

- 江崎 真澄 前掲
塩見 和子 専任
1993年9月に理事に就任、専務理事に選任される。
1995年7月理事長に選任され現在に至る。

常務理事

- 中曽根 松衛 (株)芸術現代社社長
1974年5月から1977年5月まで在任。
その後、理事として1995年6月まで在任。
現在は顧問に委嘱されている。
- 中村 哲夫 専任
財団設立と同時に理事、1977年5月に常務理事。
1990年8月まで在任。
- 下田 勝美 専任
1991年6月に常務理事に選任され現在に至る。

理事

- 糸山 英太郎 新日本企画(株)社長
1974年3月から1974年7月まで在任。

-
-
- 甘利 昴一 (社)全国モーターボート競走会連合会副会長
1974年3月から1975年3月まで在任。
- 伊藤 五郎 参議院議員
1974年3月から1975年3月まで在任。
その後、監事に転じ1992年6月まで在任。
- 芥川 輝孝 (財)日本船舶振興会理事長
1974年3月から1977年10月まで在任。
- 中村 哲夫 前掲
- 上田 基之資 (財)日本船舶振興会理事
1974年3月から1978年3月まで在任。
- 古賀 政男 作曲家
1974年3月から1978年7月まで在任。
- 藤井 堯四郎 (財)日本船舶振興会理事
1974年3月から1979年5月まで在任。
- 斎藤 高順 航空自衛隊航空音楽隊隊長
1974年3月から1991年5月まで在任
- 下谷 修久 (株)千修社長
1974年3月から1991年5月まで在任。
- 松本 秀喜 警視庁音楽隊隊長
1974年3月から1993年6月まで在任。
- 奥村 一 作曲家
1974年3月から1993年6月まで在任。
- 山本 直純 作曲家、指揮者
1974年3月から1995年6月まで在任。
- 吉田 貴壽 昭和音楽大学学長
1974年3月から1995年6月まで在任。現在は顧問に委嘱されている。
- 高橋 良雄 陸上自衛隊中央音楽隊隊長
1975年6月から1977年5月まで在任した後、
1991年5月まで監事、同年再び理事に就任し1993年6月まで在任。
- 遠藤 実 作曲家
1977年5月から1995年6月まで在任。
- 中曾根 松衛 前掲
- 田坂 鋭一 (財)日本船舶振興会理事長
1977年10月から1983年9月まで在任。
- 中沖 豊 (財)日本船舶振興会理事
1978年5月から1980年10月まで在任。

-
-
- 小口 大八 (財)日本太鼓連盟副会長
1979年5月から現在に至る。
- 町田 千秋 (財)日本船舶振興会理事
1981年5月から1985年4月まで在任。
- 千葉 武 (財)日本船舶振興会理事
1985年6月から1988年4月まで在任。
- 渋沢 一雄 団体役員
1988年5月から1991年9月まで在任。
- 苦米地 行三 (財)日本船舶振興会理事
1988年6月から1993年10月まで在任。
- 笹川 陽平 (財)日本船舶振興会理事長
1980年5月から1990年5月まで評議員を務め、
1991年6月から1993年10月まで理事在任。
- 三條 進弘 (財)競艇情報化センター理事長
1984年5月から1990年5月まで評議員を務め、
1991年6月から1995年6月まで理事在任。
1995年6月監事に転じ現在に至る。
- 岩淵 龍太郎 ヴァイオリニスト
1992年5月から現在に至る。
- 芦田 淳 ファッションデザイナー
1995年6月から現在に至る。
- 畠山 向子 (財)畠山記念美術館館長
1995年6月から現在に至る。
- 日野原 重明 聖路加国際病院名誉院長
1995年6月から現在に至る。
- Isabelle Hupperts ベルギー・ジェネラル・グループ・ジャパン駐在員事務所
日本及びアジア太平洋地区主席代表
1995年6月から現在に至る。
- 児玉 幸治 商工組合中央金庫理事長
1995年6月から現在に至る。
- 成田 豊 (株)電通社長
1995年6月から現在に至る。
- 新田 勇 (株)東芝顧問
1995年6月から現在に至る。
- 佐治 俊彦 (株)SSコミュニケーションズ会長
1995年6月から現在に至る。

-
-
- 植村 伴次郎 (株)東北新社社長
1995年6月から現在に至る。
- 西村 康雄 (財)海事産業研究所理事長
1995年9月から現在に至る。
- Grilli 栄子 エッセイスト
1998年5月から現在に至る。

監 事

- 木村 一郎 深谷市長
1974年3月24日から1974年3月31日まで在任。
- 藤 吉男 東京都モーターボート競走会会長
1974年3月から1980年12月まで在任。
- 高橋 良雄 前掲
- 伊藤 五郎 前掲
- 西本 克己 (財)日本船舶振興会監事
1991年6月から1993年10月まで在任。
- 石井 勸 作曲家
1993年6月から1995年6月まで在任。
その後評議員に転じ現在に至る。
- 三條 進弘 前掲
- 三宅 省三 弁護士
1996年5月から現在に至る。

評議員

- 秋山 日出男 (社)全日本合唱連盟副理事長
1974年5月から1976年5月まで在任。
- 増沢 健美 (社)全日本合唱連盟相談役
1974年5月から1976年5月まで在任。
- 塚原 国男 (社)全日本吹奏楽連盟事務局長
1974年5月から1976年5月まで在任。
- 小西 弥寿一 全日本青少年育成会専務理事
1974年5月から1978年5月まで在任。
- 斎藤 好司 (社)全日本吹奏楽連盟常務理事
1974年5月から1978年5月まで在任。

-
-
- 富岡 延一 B & G財団常務理事
1974年5月から1980年5月まで在任。
- 太巻 光吉 (財)日本海事科学振興財団常務理事
1974年5月から1980年5月まで在任。
- 矢尾板 一郎 (財)日本顕彰会常務理事
1974年5月から1980年5月まで在任。
- 大野 静衛 (財)日本船舶振興会理事
1974年5月から1984年5月まで在任。
- 植松 活三 (財)日本吟剣詩舞振興会事務局長
1974年5月から1986年5月まで在任。
- 島田 智一 全国モーターボート競走会連合会常務理事
1974年5月から1990年5月まで在任。
- 荘村 正人 日本ギター連盟副会長
1974年5月から1990年5月まで在任。
- 遠山 栄一 日本吹奏楽指導者協会理事
1974年5月から1990年5月まで在任。
- 笹川 陽平 前掲
- 秋山 紀夫 (社)全日本吹奏楽連盟副理事長
1974年5月から1996年5月まで在任。
- 川崎 優 作曲家
1974年5月から1996年5月まで在任。
- 大塚 順七 (財)日本防火協会常務理事
1976年5月から1980年5月まで在任。
- 服部 省二 前海上自衛隊音楽隊隊長
1976年5月から1982年5月まで在任。
- 渡辺 修 団体役員
1976年5月から1984年5月まで在任。
- 大森 脩平 会社役員
1976年5月から1994年5月まで在任。
- 本田 安次 日本民俗芸能協会会長
1978年5月から1982年5月まで在任。
- 石川 誠一 全日本音楽教育研究会事務局長
1978年5月から1986年5月まで在任。
- 関谷 晋 (社)全日本合唱連盟理事
1978年5月から1996年5月まで在任。
- 横山 正夫 (財)日本防火協会常務理事
1980年5月から1984年5月まで在任。

-
-
- 中北 清嗣 B & G財団専務理事
1980年5月から1990年5月まで在任。
- 伊東 尚正 日本マンドリン連盟会長
1982年5月から1990年5月まで在任。
- 田中 至 (財)日本造船振興財団国際業務部長
1984年5月から1990年5月まで在任。
- 富家 秀則 海上自衛隊中央音楽隊隊長
1984年5月から1990年5月まで在任。
- 狩野 薫敏 (財)日本船舶振興会広報課長
1984年5月から1994年5月まで在任。
- 川口 譲治 日本音楽家協会副会長
1984年5月から1996年5月まで在任。
- 関根 五郎 宇都宮短期大学音楽科講師
1984年5月から現在に至る。
- 吉松 昌彦 (財)日本船舶振興会事務局長
1991年2月から1994年5月まで在任。
- 井出 博正 作詞家
1991年2月から1996年5月まで在任。
- 宮地 真澄 全国モーターボート競走会連合会常務理事
1991年2月から1996年5月まで在任。
- 若松 亮任 B & G財団専務理事
1991年2月から1996年5月まで在任。
- 矢萩 保三 (財)日本吟剣詩舞振興会事務局長
1991年2月から1996年5月まで在任。
- 三條 進弘 前掲
- 渡辺 弘二 ファッションデザイナー
1992年5月から1994年5月まで在任。
- 萩原 道彦 旧東京音楽学校奏楽堂顧問
1992年5月から現在に至る。
- 神川 愛彦 (財)自治総合センター常務理事
1992年5月から現在に至る。
- 北橋 徹 山野美容芸術短期大学副学長
1992年5月から現在に至る。
- 佐藤 陽子 ヴァイオリニスト
1992年5月から現在に至る。

-
-
- 安倍 寧 音楽評論家
1996年6月から現在に至る。
- 藤田 潔 (株)ビデオプロモーション社長
1996年6月から現在に至る。
- 石井 歓 前掲
- 木全 ミツ (株)イオンフォレスト社長
1996年6月から現在に至る。
- 清原 武彦 産経新聞社代表取締役社長
1996年6月から現在に至る。
- 森下 慶子 (株)ケーピー代表取締役
1996年6月から現在に至る。
- Vittorio Volpi UBSグループ在日代表
1996年6月から現在に至る。
- 堀池 秀人 建築家
1998年6月から現在に至る。
- 須磨 久善 湘南鎌倉総合病院院長
1998年6月から現在に至る。

第四部 資料編

資料目次

- 資料 1 日本音楽財団の財務状況
- 資料 2 アマチュア音楽祭実施状況
- 資料 3 創作曲コンクール「笹川賞」実施状況及び入賞者
- 資料 4 講習会・講師派遣事業実施状況
- 資料 5 楽器貸与事業実施状況
- 資料 6 施設訪問演奏会実施状況
- 資料 7 伝統音楽公演実施状況
- 資料 8 特別公演実施状況
- 資料 9 国際交流事業実施状況
- 資料10 パレード実施状況
- 資料11 練習施設貸与状況
- 資料12 特別演奏会実施状況
- 資料13 音楽助成金交付事業実施状況
- 資料14 所有弦楽器一覧
- 資料15 日本音楽財団の事業費推移

資料1 日本音楽財団の財務状況

(金額単位：1,000円)

(財)日本音楽財団(1999.3.31.)

年 度	当 期 収 入									収入合計		純当期収入		
	補助金(A)		助成金(B)		事業基金(C)		基金取崩(D)	自己資金(E)		小計(F)	繰越金(G)	合計(H)	(F-D)	
	金額	%	金額	%	金額	%	金額	金額	%	金額	金額	金額	金額	%
基本財産			60,000					10,000		70,000		70,000	70,000	
73/78	290,759	48.8	175,920	29.6				68,628	11.5	535,307	86,091	621,398	535,307	100.0
79/83	220,088	47.6	172,300	37.3				69,746	15.1	462,134	115,560	577,694	462,134	100.0
84/83	133,936	39.2	152,100	44.5				55,909	16.4	341,945	119,995	461,940	341,945	100.0
89/93	86,632	3.8	231,600	10.1	1,900,000	83.1	740,000	69,176	3.0	3,027,408	151,439	3,178,847	2,287,408	100.0
94/98	104,780	2.2	549,100	11.6	3,969,300	84.0	217,000	100,773	2.1	4,940,953	137,826	5,078,779	4,723,953	100.0
合 計	836,195	10.0	1,281,020	15.3	5,869,300	70.3	957,000	364,232	4.4	9,307,747	610,911	9,918,658	8,350,747	100.0
総合計	836,195	9.9	1,341,020	15.9	5,869,300	69.7	957,000	374,232	4.4	9,377,747	610,911	9,988,658	8,420,747	100.0

注) 基本財産のうち自己資金の1千万円は、故笹川良一氏の寄付によるものである。

資料2 アマチュア音楽祭実施状況

	名 称	日 時	会 場	団体数	聴衆	事業費
1回	全国大会	1974年 8月	東京・普門館	20団体	延6,500名	1,477万円
2回	大阪大会	1975年12月	中之島フェスティバルホール	13団体	2,300名	621万円
3回	全国大会	1976年 2月	NHKホール	19団体	3,300名	854万円
4回	名古屋大会	1977年 1月	名古屋市民会館	13団体	1,900名	383万円
5回	全国大会	1977年 2月	NHKホール	16団体	3,200名	999万円
6回	全国大会	1977年11月	NHKホール	14団体	3,800名	1,329万円
7回	石巻大会	1978年 1月	石巻市民会館	9団体	1,200名	639万円
8回	全国大会	1978年10月	NHKホール	15団体	3,570名	1,255万円
9回	四国大会	1978年12月	松山市民会館	16団体	2,079名	481万円
10回	国際児童年協賛 宇宙博記念大会	1979年 3月	東京・宇宙科学博覧会会場	20団体 ・2名	30,000名	784万円
11回	イン千葉	1980年 1月	千葉県文化会館	11団体	1,700名	508万円
12回	イン京都	1980年 2月	京都会館	12団体	2,300名	661万円
13回	イン松本	1980年 3月	松本市民会館	13団体	1,800名	764万円
14回	イン松山	1980年 3月	松山市民会館	28団体	5,000名	767万円
15回	イン名古屋	1981年 2月	愛知県文化会館	17団体	2,300名	659万円
16回	イン広島	1981年 3月	広島郵便貯金会館	37団体	2,500名	802万円
17回	イン岐阜	1982年 3月	大垣市民会館	13団体	1,800名	645万円
18回	イン静岡	1982年 3月	清水市民文化会館	27団体	1,700名	533万円
19回	「笹川賞創作作曲10周年記念 '83春の合唱フェスティバル」	1983年 3月	東京・簡易保険ホール	9団体	1,800名	561万円
20回	イン四国	1984年 3月	松山市民会館大ホール	13団体	2,400名	730万円
21回	イン山梨	1985年 3月	山梨県民文化大ホール	15団体	2,000名	556万円
22回	イン大阪	1986年 3月	守口市民会館	13団体	1,800名	460万円
23回	イン熊本	1987年 3月	熊本県立劇場コンサートホール	15団体	1,800名	556万円
24回	イン信州	1989年 3月	松本市民会館	14団体	1,500名	568万円
25回	新春アマチュア音楽祭	1991年 1月	埼玉県・川口総合文化センター	11団体	1,500名	1,288万円
26回	新春アマチュア音楽祭'93	1993年 1月	東京都・ゆうぽうと	10団体 ・4名	1,450名	1,509万円
27回	新春アマチュア音楽祭'94	1994年 1月	埼玉県・川口総合文化センター	11団体 ・3名	1,850名	1,324万円

資料3 創作曲コンクール「笹川賞」実施状況及び入賞者

年 度	種 別	位	曲 名	作 曲 者	事業費
'74年度(第1回)	(吹奏楽)	1位	吹奏楽の為の「カプリス」	保科 洋	227万円
'75年度(第2回)	(吹奏楽) A部門	1位	「マーチ・エレガント」	中村 均	546万円
		2位	無題	工藤 公夫	
		3位	マーチ	斎藤 正和	
	B部門	1位	「ノスタルジック・ラブソディ」	藤掛 廣幸	
		2位	ウィルドフェスティバル	谷川 健次	
		3位	古戦場	長谷 勝寿	
	C部門	1位	「ばんがむり」	中村 透	
		2位	交響的瞬間	兼田 敏	
		3位	若き人々より「躍動」	中村 隆一	
'76年度(第3回)	(吹奏楽) A部門	1位	「CHACONNE」	藤掛 廣幸	578万円
		2位	「日本の秋」	広橋 浩	
		3位	行進曲「海国日本」	斉藤 丑松	
	B部門	1位	「プレリュード・フォーバンド」	田島 清明	
		2位	「吹奏楽のための累」	寺井 尚行	
		3位	DANZA SYNFONICA	郡司 孝	
	C部門	1位	「吹奏楽のためのカンツォーネ」	藤田 玄播	
'77年度(第4回)	吹奏楽部門入賞曲	1位	吹奏楽のための 「トッカータ風プレリュード」	田沢 茂	418万円
		2位	シンフォニック・オスティナート	佐藤 秀隆	
		3位	吹奏楽のためのロンド 「フル・ブラスト」	平井 文和	
	合唱曲部門入賞曲	1位	幼年連禱より「花」	新実 徳英	
		2位	優しき歌より「序の歌」	植木 泰弘	
		3位	ひとり林に	太田 潤	
'78年度(第5回)	吹奏楽部門入賞曲	1位	吹奏楽のための「フィナーレ」	田沢 茂	550万円
		2位	吹奏楽曲「民話風」	平井 文和	
		3位	プレリュード	寺井 尚行	
	合唱曲部門入賞曲	1位	マザーグースの3つの歌	青島 広志	
		2位	夏花の歌	佐藤 秀隆	
		3位	二十億光年の孤独	平野 淳一	
'79年度(第6回)	吹奏楽部門入賞曲	1位	吹奏楽のための前奏曲「舞」	平井 文和	579万円
		2位	吹奏楽のための三章	田沢 茂	
		3位	吹奏楽のためのプログレス	伊藤 康英	
	合唱曲部門入賞曲	1位	虹の輪	尾形 敏幸	
		2位	女の子のマーチ	佐藤 秀隆	
		3位	コンドルの空	会田 道孝	

年 度	種 別	曲 名	作 曲 者	事業費
'80年度(第7回)	合唱曲部門入賞曲	1位 一人林に 2位 眠りの誘い 3位 仙境より「早春」	山下 耕司 三ツ石潤司 佐藤 秀隆	390万円
'81年度(第8回)	吹奏楽曲部門入賞曲	1位 祝典のための行進曲 `Festal Field March` 2位 前進 3位 風に乗って	高山 直也 中村 暁生 矢部 政男	565万円
	合唱曲部門入賞曲	1位 ぼくは猫する (寺山修司作詩) 2位 仙境より 北の春(丸山董作詩) 3位 子守唄よ	藤沢 道夫 佐藤 秀隆 三ツ石潤司	
'82年度(第9回)	吹奏楽曲部門入賞曲	1位 「Sulla Piazza」(広場にて) 2位 March希望 3位 行進曲「カーニバル」	古賀 郁利 岩下 章二 出田 敬三	641万円
	合唱曲部門入賞曲	1位 母は太陽のように 2位 秋の瞳 (八木重吉作詞) 3位 優しき歌より「序の歌」	田原 碩 吉岡 弘之 飯塚 邦彦	
'83年度(第10回)	吹奏楽曲部門入賞曲	1位 行進曲「銀嶺」 2位 インドラダ —行進曲風序曲— 3位 行進曲「雄渾」 次点 風の行進	神 明 今井 聡 山本 諒介 菅野 茂	703万円
	合唱曲部門入賞者	1位 子どものための2つの詩 2位 私は冬枯れの海にいます(吉行理恵作詩) 3位 呼び声 次点 レモン哀歌	青島 広志 大山 晃 田原 硯 村田 敦子	
'84年度(第12回)	吹奏楽曲部門入賞者	1位 行進曲「青春」 2位 行進曲「海の貴婦人」 3位 行進曲「合気道」 3位 行進曲「海の青年」	松尾 善雄 矢部 政男 白井 活三 堀 滝比呂	710万円
	合唱曲部門入賞曲	1位 小さな恋のものがたり 2位 愛さないの愛せないの 3位 子どものためのわらべうた	沼尻 竜典 壁真 理子 板本 勝百	
'85年度(第13回)	吹奏楽曲部門入賞曲	1位 フェスタルマーチ 2位 ウィセ レスプリ 3位 行進曲「風にのせて」	四反田素幸 繁田 卓也 五十嵐文昭	691万円
	合唱曲部門入賞曲	1位 8月の氷河 2位 白鷺の詩より「白鷺乱舞」 3位 五月の少女	大島 崇子 鈴木 憲夫 末樹 零	

年 度	種 別	曲 名	作 曲 者	事業費	
'86年度(第14回)	吹奏楽曲部門入賞曲	1位	Fanfare & March for Festival	樋口 博	634万円
		2位	March Light Staff	矢部 政男	
		3位	The Brave March	中野 英之	
	合唱曲部門入賞曲	1位	「街角」	千原 英喜	
		2位	「少女」	林 達也	
		3位	「さびしきみち」	塚本 一成	
'87年度(第15回)	吹奏楽曲部門入賞曲	1位	CAMPAS MARCH 6/8	坂本 智	584万円
		2位	コタンの祭り	山田 春夫	
		3位	CAMPAS MARCH V (サイダーで割るビールのうまさ)	坂本 智	
	合唱曲部門入賞曲	1位	「眠る娘」	淳 也一	
		2位	「忘れられた海」	林 達也	
		3位	「在りし日の歌より“春”」	柴田 典子	
'88年度(第16回)	吹奏楽曲部門入賞曲	1位	マーチ「オーシャン・ブルー」	松尾 善雄	685万円
		2位	MARCH TRENDY	岡田 知也	
		3位	Formation	長谷川浩一	
	合唱曲部門入賞曲	1位	「また落葉林で」	林 達也	
		2位	「夢の中の春へ」	川上 哲夫	
		3位	「ブドウと少年のはなし」	繁田 卓也	
'89年度(第17回)	吹奏楽曲部門入賞曲	1位	「行進曲・白銀の青春」	山田 春男	221万円
		2位	「March " April . May」	矢部 政男	
		3位	行進曲「南十字星」	白井 活三	
	合唱曲部門入賞曲	1位	「女声合唱曲・子守唄」	佐藤 公基	
		2位	「朝に」	林 達也	
		3位	「運命について」	渡辺 尚子	
'91年度(第18回)	吹奏楽曲部門入賞曲	1位	「MIRAGE」	五島 一雄	899万円
		2位	LET'S MARCH !	松尾 善雄	
		3位	SUN WAY	野村 正憲	
	合唱曲部門入賞曲	1位	「雪がふる」	近藤 春恵	
		2位	「白い鳩になって」	町田 治	
		3位	「やさしさが花になるなら」	泉田 輝子	
'92年度(第19回)	吹奏楽曲部門入賞者	1位	「Marching Fantasy」	長谷川浩一	987万円
		2位	跳べ!! パラグライダー	鎌田 雅人	
		3位	光る風	松尾 善雄	
	合唱曲部門入賞曲	1位	女声合唱曲「さくら」	林 輝	
		2位	銀の箸と匙	倉知 竜也	
		3位	「遠い季節」より風花	二宮 穀	

年 度	種 別	曲 名	作 曲 者	事業費	
'93年度(第20回)	吹奏楽曲部門入賞曲	1位	マーチ「黒潮」	松尾 善雄	1,050万円
		2位	アロング・ウィズ・マーチ	長谷川浩一	
		3位	マイ・ラクジュアリー・ドリーム	長谷川浩一	
	合唱曲部門入賞曲	1位	泉のほとり	林 達也	
		2位	星空の向こうから	倉知 竜也	
		3位	みずいろの風	竹野 晴子	

資料4 講習会・講師派遣事業実施状況

年度	形態	実施内容	総回数	事業費
'74年度	講習会	バンド・コーラス・オーケストラ	計 1回	1,617万円
'75年度	講習会	マーチング&バトン 2回、ギター 6回	計 8回	422万円
'76年度	講習会 講師派遣	マーチング&バトン 3回、ギター 1回 マーチング&バトン 7回、吹奏楽 4回、合唱 1回	計 4回 計 12回	301万円 363万円
'77年度	講習会 講師派遣	マーチング&バトン指導者講習 2回、吹奏楽、ギター各 1回 吹奏楽 3回、マーチング、バトン各 1回	計 4回 計 5回	416万円 812万円
'78年度	講習会 講師派遣	吹奏楽、バトン、合唱各 1回 吹奏楽 2回、バトン、合唱各 1回	計 3回 計 4回	234万円 714万円
'79年度	講習会 講師派遣	吹奏楽、太鼓、合唱各 1回 吹奏楽 2回、太鼓、マーチング&バトン各 1回	計 3回 計 4回	466万円 299万円
'80年度	講習会 講師派遣	吹奏楽、太鼓、合唱各 1回 マーチング指導者講習 6回、吹奏楽 2回	計 3回 計 8回	518万円 274万円
'81年度	講習会 講師派遣	幼児音楽指導者講習、太鼓、合唱各 1回 吹奏楽 4回、鼓笛、合唱、太鼓各 1回	計 3回 計 7回	520万円 310万円
'82年度	講習会 講師派遣	太鼓、オーケストラ、吹奏楽各 1回 吹奏楽 3回、鼓笛、幼児音楽指導者講習、太鼓、指揮法、合唱各 1回	計 3回 計 8回	539万円 417万円
'83年度	講習会 講師派遣	太鼓、マーチング、吹奏楽各 1回 吹奏楽 4回、療育音楽、鼓笛、幼児音楽指導者講習、太鼓各 1回	計 3回 計 8回	606万円 475万円
'84年度	講習会 講師派遣	太鼓、吹奏楽、器楽各 1回 吹奏楽 2回、療育音楽、太鼓、幼児音楽指導者講習各 1回	計 3回 計 5回	562万円 376万円
'85年度	講習会 講師派遣	太鼓、吹奏楽、マーチング各 1回 吹奏楽、療育音楽、幼児音楽指導者講習、太鼓各 1回	計 3回 計 4回	440万円 313万円
'86年度	講習会 講師派遣	太鼓、吹奏楽、マーチング各 1回 太鼓、吹奏楽、マーチング各 1回	計 3回 計 3回	581万円 272万円
'87年度	講習会 講師派遣	太鼓、幼児音楽指導者講習各 1回 吹奏楽 2回	計 2回 計 2回	350万円 192万円
'88年度	講習会 講師派遣	太鼓、オーケストラ各 1回 療育音楽 3回、マーチング 1回	計 2回 計 4回	237万円 155万円
'89年度	講習会	太鼓、幼児音楽指導者講習各 1回	計 2回	249万円
'91年度	講習会	太鼓、マーチング&バトン各 1回	計 2回	390万円
'92年度	講師派遣	バトン 3回、太鼓、マーチング&バトン、合唱各 1回	計 6回	227万円
'93年度	講師派遣	指揮法 4回、太鼓 2回、合唱 2回、マーチング 2回、バトン 1回	計 11回	415万円

資料5 楽器貸与事業実施状況

年 度	貸与楽器購入状況	事業費
'74年度	・パレード・ユニフォーム ・ティンパニー（パールNo.55SML）	100着 11基 592万円
'75年度	・チャイム（プレミアNo.865） ・和太鼓 長胴宮太鼓（1尺6寸） ・パレード・ユニフォーム	6個 2基 100着 640万円
'76年度	・チャイム（プレミアNo.865） ・和太鼓 ・パレード・ユニフォーム	5個 4個 100着 594万円
'77年度	・ドラ（パイステ32"） ・和太鼓 ・ピアノ（カワイBL-71） ・パレード・ユニフォーム	6台 11基 1台 100着 550万円
'78年度	・ドラ（スイス製パイステ32"） ・和太鼓 長胴宮太鼓5個、桶胴太鼓1個、リズム太鼓1個、芸能太鼓1個 ・ピアノ（カワイBL-71） ・パレード・ユニフォーム	15台 8個 1台 100着 674万円
'79年度	・和太鼓 長胴宮太鼓（1尺7寸）28個、長胴宮太鼓（1尺6寸） ・パレード・ユニフォーム	29個 200着 1,436万円
'80年度	・和太鼓 長胴宮太鼓（1尺6寸）	5個 181万円
'81年度	・和太鼓 長胴宮太鼓（1尺6寸）	6個 216万円
'82年度	・パレード・ユニフォーム ・和太鼓 長胴宮太鼓（1尺6寸）	100着 13個 745万円
'83年度	・和太鼓 長胴宮太鼓（1尺6寸）	8個 303万円
'84年度	・和太鼓 長胴宮太鼓（1尺6寸）	8個 306万円
'85年度	・和太鼓 長胴宮太鼓（1尺6寸）	8個 313万円
'86年度	・和太鼓 長胴宮太鼓（1尺6寸）	8個 307万円
'87年度	・和太鼓 長胴宮太鼓（1尺6寸）	9個 340万円
'88年度	・和太鼓 長胴宮太鼓（1尺6寸）	8個 307万円
'89年度	・和太鼓 長胴宮太鼓（1尺6寸）	8個 355万円

資料 6 施設訪問演奏会実施状況

年度	実施回数	演奏団体	事業費
'74年度	12回	吹奏楽12	315万円
'75年度	14回	吹奏楽14	312万円
'76年度	12回	吹奏楽11、オーケストラ1	283万円
'77年度	15回	吹奏楽12、オーケストラ1、合唱1、鼓笛1	356万円
'78年度	15回	吹奏楽10、合唱3、鼓笛1、太鼓1	353万円
'79年度	30回	吹奏楽14、合唱4、鼓笛1、太鼓6、マンドリン4、ギター1	636万円
'80年度	30回	吹奏楽13、合唱5、太鼓3、マンドリン2、オーケストラ1、その他6	626万円
'81年度	32回	吹奏楽14、合唱5、太鼓5、オーケストラ2、その他6	625万円
'82年度	16回	吹奏楽5、合唱2、太鼓4、マンドリン1、その他4	353万円
'83年度	20回	吹奏楽14、合唱1、太鼓3、マンドリン2	425万円
'84年度	20回	吹奏楽13、合唱1、太鼓4、マンドリン1、洋舞1	385万円
'85年度	15回	吹奏楽6、合唱2、太鼓6、マンドリン1	300万円
'86年度	9回	吹奏楽3、合唱1、太鼓4、その他1	198万円
'87年度	10回	吹奏楽2、合唱1、太鼓2、その他5	196万円
'88年度	9回	吹奏楽1、太鼓5、その他3	180万円

資料7 伝統音楽公演実施状況

年 度	公 演 名	場 所	事業費
'76年度	那覇少年少女合唱団東京特別公演	東京都千代田区 国立教育会館虎ノ門ホール	449万円
'77年度	第2回伝統音楽公演 日本の太鼓 ～みちのくの響き～	宮城県仙台市 仙台市民会館	448万円
'78年度	第3回伝統音楽公演 日本の太鼓 ～東海のひびき～	愛知県名古屋市 愛知文化講堂	486万円
'79年度	伝統音楽研究会 —日本の太鼓全国大会—	東京都港区 笹川記念会館国際会議場 東京都江東区 宇宙科学博覧会特設ステージ	1,289万円
	日本の太鼓 ふるさとの民踊・春の祭典	愛知県一宮市 一宮市民会館	438万円
'80年度	伝統音楽研究会 —第7回伝統音楽公演— 日本の太鼓ふるさとの民謡	石川県金沢市 金沢市観光会館	630万円
'81年度	第8回伝統音楽公演 「日本の太鼓・伝統と創造」	東京都港区 日本消防会館ニッショーホール	707万円
'82年度	第9回伝統音楽公演 「日本の太鼓・港にこだまする唄とおどり」	兵庫県神戸市 神戸国際会館	738万円
'83年度	第10回伝統音楽公演 「日本の太鼓・ふるさとの伝統と創造」	長野県岡谷市 岡谷市民会館	620万円
'84年度	第11回伝統音楽公演 「日本の太鼓・伝統と創造」	山形県天童市 天童市民文化会館大ホール	659万円
'85年度	第12回伝統音楽公演 「日本の太鼓・伝統と創造」	石川県金沢市 金沢市観光会館	673万円
'86年度	第13回伝統音楽公演 「日本の太鼓・ふるさとの伝統と創造」	京都府舞鶴市 舞鶴市総合文化会館	492万円
'87年度	第14回伝統音楽公演 「山形の太鼓フェスティバル・伝統と創造」	山形県山形市 山形県民会館	493万円
'88年度	第15回伝統音楽公演 「日本の太鼓・伝統と創造」	千葉県銚子市 銚子市青少年文化会館	537万円
'89年度	第16回伝統音楽公演 「第1回全国少年少女太鼓フェスティバル」	石川県金沢市 金沢市文化ホール	599万円
'92年度	第17回伝統音楽公演 「日本太鼓フェスティバル'93」	東京都府中市 府中の森芸術劇場	1,338万円

資料 8 特別公演実施状況

年 度	公 演 名	会 場	事業費
'76年度	吹奏楽曲「笹川賞受賞記念」新作発表演奏会	東京都台東区 上野学園石橋メモリアルホール	144万円
'77年度	第2回吹奏楽曲新作発表演奏会	東京都千代田区 都市センターホール	210万円
'78年度	第3回吹奏楽曲新作発表演奏会	東京都台東区 上野学園石橋メモリアルホール	190万円
'79年度	第4回吹奏楽曲新作発表演奏会	広島県広島市 見真講堂	267万円
'80年度	マンドリン・フェスティバル'81イン大阪	大阪府大阪市 大阪府立青少年会館文化ホール	407万円
'81年度	第2回全日本ハーモニカ音楽祭	東京都千代田区 よみうりホール	409万円
'83年度	笹川賞創作曲創設10周年記念 吹奏楽ニューイヤーフェスティバル	大阪府大阪市 朝日放送ザ・シンフォニーホール	715万円
'85年度	'86春輝く音楽舞踊祭	東京都千代田区 国立教育会館虎ノ門ホール	543万円
'86年度	吹奏楽の楽しみ 「ザ・ベストサウンド・コンサート」 笹川賞マーチフェスティバル	兵庫県尼崎市 アルカイックホール	400万円
'87年度	日本民謡フェスティバル・イン神戸	兵庫県神戸市 神戸国際劇場	523万円
'88年度	第1回現代の邦楽フェスティバル	岡山県岡山市 津島運動公園内 岡山武道館	486万円

資料9 国際交流事業実施状況

年 度	事業名	派遣期間	事業費
'73年度	1) 日米吹奏楽指導者合同会議支援 2) 全米音楽クリニックに調査員派遣補助	74年3月26日 ～31日	200万円 61万円
'74年度	1) 高等学校吹奏楽団韓国に派遣	74年7月13日 ～20日	702万円
	2) 韓国高等学校を日本に招致	74年8月13日 ～20日	240万円
	3) 米国独立200年祭記念パレード事前調査	75年3月1日 ～14日	140万円
	4) 昭和75年度高等学校吹奏楽団 東南アジア親善演奏旅行事前調査	74年9月24日 ～30日	22万円
'75年度	1) 高等学校吹奏楽団 東南アジア親善演奏旅行 2) 合唱指導者会議(西独)参加 3) 米国独立200年祭記念パレード事前打合	75年7月1日 ～8日 75年7月23日 ～8月21日 76年2月17日 ～27日	1,903万円
'76年度	1) アメリカ独立200年祭記念 全日本高校選抜吹奏楽団派遣	76年6月27日 ～7月11日	7,492万円
'77年度	1) 香港・日本親善 全日本大学選抜吹奏楽団派遣	77年12月28日 ～78年1月2日	981万円
	2) ウスター音楽祭作曲家会議派遣(指導者)	77年9月2日 ～10月13日	259万円
'78年度	1) ケルクラード国際音楽コンクール(オランダ)に 静岡選抜ユース吹奏楽団派遣	78年7月11日 ～27日(木)15泊17日	3,029万円
	2) ケルクラード国際音楽コンクール グランプリ受賞記念演奏会	78年7月28日	22万円

資料10 パレード実施状況

年 度	パレード名	場 所	事業費
'74年度	1) 川之江市パレード 2) 広島市パレード 3) 東京'74シルバーパレード 4) 神戸パレード 5) 盛岡パレード	愛媛県川之江市 広島県広島市内 東京都中央区銀座 兵庫県神戸市 岩手県盛岡市	575万円
'75年度	1) 富山市パレード 2) 東京'75ゴールデンパレード 3) 名古屋パレード 4) 東京'76シルバーパレード	富山市内 東京都千代田区日比谷 名古屋市内 東京都中央区銀座	566万円
'76年度	1) '76ゴールデンパレード 2) '76シルバーパレード 3) 静岡マーチングバンドパレード 4) 埼玉パレード	東京都千代田区日比谷 東京都港区新橋 静岡県駿府公園 埼玉県上尾旧中仙道	666万円
'77年度	1) '77ゴールデンパレード 2) '77シルバーパレード 3) 三重県バンドフェスティバルパレード	東京都中央区銀座 東京都日本橋 三重県津市	542万円
'78年度	1) 宇宙科学博覧会記念パレード 2) 三重県バンドフェスティバルパレード 3) マーチングバンド全国大会記念パレード 4) 松山市制90年記念パレード	東京都新宿区 三重県津市 神奈川県横浜市 愛媛県松山市	438万円
'79年度	1) 全国高等学校総合体育大会記念パレード 2) 三重県バンドフェスティバルパレード	愛媛県松山市 三重県津市	395万円
'80年度	1) 世界ライ救済年間協賛パレード 2) 三重県バンドフェスティバルパレード	東京都新宿区 三重県津市	364万円
'81年度	1) 三重県バンドフェスティバルパレード 2) 春の交通安全大パレード	三重県津市 岐阜県岐阜市	454万円
'82年度	1) 三重県バンドフェスティバルパレード	三重県津市	303万円
'83年度	1) 交通安全推進音楽パレード	岐阜県大垣市	259万円
'84年度	1) 春の交通安全音楽パレード	愛媛県松山市	185万円

資料11 練習施設貸与状況

年 度	場 所	事業費
'76年度	東京海洋会館32回、上野学園21回、計53回	67万円
'77年度	東京海洋会館56回、上野学園24回、計80回	105万円
'78年度	東京海洋会館27回、愛国学園1回、京都会館1回 宮崎県民文化ホール1回、都城市民会館1回、南山小学校1回	51万円
'79年度	こぞくら幼稚園2回、平川幼稚園2回、夢想幼稚園2回 救世軍京都小隊2回、ひろしま楽器3回、松山市民会館1回	40万円

資料12 特別演奏会実施状況

年 度	演 奏 会 名	月 日	場 所	事業費
'94年度	ロリン・マゼール指揮 フィルハーモニア管弦楽団演奏会	5月26日	東京サントリーホール	2,000万円
'95年度	ロリン・マゼール指揮 ピッツバーグ管弦楽団演奏会	5月15日	東京芸術劇場大ホール	2,000万円
'96年度	1) コントラバス・レクチャー・クリニック 及びコンサート a) コントラバス・レクチャー ・クリニック(音大生・プロを対象) b) コントラバス・レクチャー・コンサート	10月26日 ・27日 10月27日	関西日仏学館 稲畑ホール(京都市) 京都コンサートホール 小ホール	638万円
	2) 「ふたつのストラディヴァリウスの夕べ」 演奏会(財団所有楽器使用)	12月11日	東京王子ホール	
'97年度	ロリン・マゼール指揮 フィルハーモニア管弦楽団演奏会	5月15日	東京国際フォーラム ホールC	2,700万円
'98年度	オール・ストラディヴァリウス・コンサート (設立25周年記念事業)	9月8日	東京オペラシティ コンサートホール	1,700万円

資料13 音楽助成金交付事業実施状況

年度	交付分野	件数	事業費
'94年度			622万円
	吹奏楽・マーチング	4	50万円
	合唱	1	25万円
	太鼓	3	200万円
	室内楽	2	207万円
	オーケストラ	1	40万円
	療育音楽	1	100万円
'95年度			900万円
	吹奏楽・マーチング	3	150万円
	合唱	3	200万円
	太鼓	2	250万円
	室内楽	2	300万円
'96年度			1,999万円
	吹奏楽・マーチング	1	200万円
	合唱	1	150万円
	太鼓	3	699万円
	室内楽	4	500万円
	オーケストラ	4	450万円
'97年度			1,797万円
	吹奏楽・マーチング	2	200万円
	合唱	2	300万円
	太鼓	1	100万円
	室内楽	5	827万円
	オーケストラ	2	270万円
	ギター	1	100万円
'98年度			1,870万円
	吹奏楽・マーチング	2	200万円
	合唱	3	420万円
	室内楽	4	550万円
	オーケストラ	4	700万

資料14 所有弦楽器一覽

1999年3月現在

樂器名		購入日
Paganini Quartet ①～④		1994年3月購入
①Stradivarius Violin	1680年製	
②Stradivarius Violin	1727年製	
③Stradivarius Viola	1731年製	
④Stradivarius Cello	1736年製	
⑤Stradivarius Violin	1708年製 “Huggins”	1995年3月購入
⑥Guaneri Del Gesu Violin	1736年製 “Muntz”	1995年3月購入
⑦Stradivarius Violin	1709年製 “Engleman”	1996年5月購入
⑧Stradivarius Cello	1730年製 “Feuermann”	1996年12月購入
⑨Stradivarius Violin	1736年製 “Muntz”	1997年8月購入
⑩Guaneri Del Gesu Violin	1740年製 “Ysaye”	1998年3月購入
⑪Stradivarius Violin	1722年製 “Jupiter”	1998年5月購入
⑫Stradivarius Violin	1716年製 “Booth”	1999年3月購入

資料15 日本音楽財団の事業費推移

年 度	支 出							
	合 計		一般会計事業		音楽国際交流事業		楽器購入費	
	金 額	%	金額	%	金額	%	金額	%
1973	2,610	100.0	2,610	100.0				
1974	59,057	100.0	59,057	100.0				
1975	59,531	100.0	59,531	100.0				
1976	98,208	100.0	98,208	100.0				
1977	70,663	100.0	70,663	100.0				
1978	92,614	100.0	92,614	100.0				
1979	85,443	100.0	85,443	100.0				
1980	48,509	100.0	48,509	100.0				
1981	49,883	100.0	49,883	100.0				
1982	43,026	100.0	43,026	100.0				
1983	48,362	100.0	48,362	100.0				
1984	37,414	100.0	37,414	100.0				
1985	37,411	100.0	37,411	100.0				
1986	34,402	100.0	34,402	100.0				
1987	26,782	100.0	26,782	100.0				
1988	31,551	100.0	31,551	100.0				
1989	14,431	100.0	14,431	100.0				
1990	0		0					
1991	27,606	100.0	27,606	100.0				
1992	42,003	100.0	42,003	100.0				
1993	1,737,317	100.0	29,626	1.7	92,266	5.3	1,615,425	93.0
小 計	2,646,773	100.0	939,082	35.5	82,266	5.3	1,615,425	93.0
1994	546,930	100.0	30,667	5.6	61,639	11.3	454,624	83.1
1995	116,624	100.0	31,184	26.7	73,278	62.8	12,162	10.4
1996	955,206	100.0	28,768	3.0	73,971	7.7	852,467	89.2
1997	1,172,816	100.0	18,868	1.6	87,206	7.4	1,066,742	91.0
1998	1,169,974	100.0	22,833	2.0	78,236	6.7	1,068,905	91.4
小 計	3,961,550	100.0	132,320	3.3	374,330	9.4	3,454,900	87.2
合 計	6,608,323	100.0	1,071,402	16.2	466,596	7.1	5,070,325	76.7

索引

ア	アルベール 2 世・パオラ王妃両殿下	Their Majesties King Albert and Queen Paola	P.56, 61
	イースター・フェスティバル	Easter Festival	P.66
	イッサーリス, スティーヴン	Isserlis, Steven	P.58, 62, 63
	インディアナ大学	Indiana University	P.54
	ウイルソン	Wilson	P.63
	英国王立音楽院デュークホール	Royal Academy of Music, The Duke's Hall	P.63
	エングルマン.E.P.博士	Dr.Engleman, E.P.	P.57
カ	カラヤン財団	The Karajan Foundation	P.66
	グアルネリ, バルトロメオ・ジュゼッペ	Guarneri, Bartolomeo Giuseppe	P.57, 59
	グレートブリテン・ササカワ財団	The Great Britain Sasakawa Foundation	P.63
	ケルクラー国際音楽コンクール	Kerkrade, International World Music Competition	P.40
	コーコラン美術館	Corcoran Gallery of Arts	P.55
	ゴトリーブ, ハワード	Gottlieb, Howard	P.58
	コペルマン, ミハイル	Kopelman, Mihail	P.50, 55
サ	ザルツブルグ・フェスティバル	Salzburg Festival	P.66
	シノポリー, ジュゼッペ	Sinopoli, Giuseppe	P.57
	シャトーヴィレ財団	The Chateauville Foundation	P.67
	シュタルケル, ヤーノシュ	Starker, Janos	P.54
	ジュリアード音楽院	The Juilliard School	P.54
	ショルティ, ゲオルグ	Solti, Georg	P.63
	スターン, アイザック	Stern, Issac	P.59
	ストラディヴァリ, アントニオ	Stradivari, Antonio	P.53, 55, 56, 57, 58, 59
	ストラディヴァリウス (アントニオ・ストラディヴァリ製作の楽器を言う)	Stradivarius	P.5, 7, 49, 50, 51, 53, 54, 55, 58, 61, 62, 63
	ズナイダー, ニコライ	Znaider, Nikolaj	P.50, 56, 63
	スミソニアン研究所国立自然史博物館	Smithsonian National Museum of Natural History	P.64
タ	チャン, サラ	Chang, Sarah	P.55
	デ・ラオノア, ジャン・ピエール	De Launoit, Comte Jean-Pierre	P.54
	ディレイ, ドロシー	DeLay, Dorothy	P.54
	デル・ジュス (バルトロメオ・ジュゼッペ・グアルネリの通称)	del Gesu	P.5, 54, 57, 59
	東京クワルテット	Tokyo String Quartet	P.50, 55, 62
	ドウズ・アンドリュウ	Dawes, Andrew	P.55
	ドリスデン・シュターツカペレ	Dresden Staatskapelle	P.57
ハ	バーマン, パベル	Berman, Pavel	P.57
	パールマン	Perlman, Itzhak	P.67
	ハーン, ヒラリー	Hahn, Hilary	P.56
	バイエルン放送交響楽団	Das Symphonieorchester des Bayerischen Rundfunks	P.61
	パガニーニ, ニコロ	Paganini, Niccolo	P.55
	ハギンス, ウィリアム卿	Sir Huggins, William	P.56
	ハグナー, ヴィヴィアン	Hagner, Viviane	P.59
	パリゾー, アルド	Parisot, Aldo	P.58
	ピッツバーグ交響楽団	Pittsburgh Symphony Orchestra	P.47, 66
	ヒル, アルフレッド	Hill, Alfred	P.56
	ヒル, フィリップ	Hill, Phillips	P.57
	フィルハーモニア管弦楽団	Philharmonia Orchestra	P.47, 60
	フォイアマン, エマニエル	Feuermann, Emanuel	P.58
	ブラウン, イオナ	Brown, Iona	P.59
	フランス国立放送フィルハーモニック管弦楽団	Orchestre Philharmonique de Radio France	P.58
	フランセ, ジャック	Francais, Jacques	P.57
	ベルギー, エリザベート王妃国際音楽コンクール	The Queen Elisabeth International Music Competition, Belgium	P.54, 56, 61
マ	マイヤース, アン・アキコ	Meyers, Anne Akiko	P.57
	マゼール, ロリン	Maazel, Lorin	P.47, 49, 54, 56, 60, 61
	ミンツ, シュロモ	Mintz, Shlomo	P.55
	ムンツ	Muntz, H.M.	P.58
	モルティエ, ジェラルド	Mortier, Gerard	P.66
ラ	ラクリン, ジュリアン	Rachlin, Julian	P.47
	リン, チョー・リャン	Lin, Cho-Liang	P.56
	ロン・ティボー国際音楽コンクール	Long-Jacques Thibaud International Competition	P.58

財団25年の歩み

2002年3月発行

発 行 財団法人 日本音楽財団
〒107-0052
東京都港区赤坂1-2-2
日本財団ビル5階
Tel 03-6229-5566
Fax 03-6229-5570
<http://www.nmf.or.jp>

発 行 人 理 事 長 塩 見 和 子
企 画・編 集 責 任 者 古 作 徳 雄
小 早 川 隆
秋 田 稔
石 川 礼 子
富 永 葉 子

印 刷・製 本 大光社印刷株式会社